
The Radical **アンドロイド—タミネちゃん—**

八紘新音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Radicalアンドロイド―タミネちゃん―

【Nコード】

N9962Y

【作者名】

八紘新音

【あらすじ】

1999年晩秋。名門私立高校に通う優等生、一条秀真の元に謎の、女は青い髪に銀色のコスチュームを見にまいった奇異な少女が現れる。そしていきなり一条に襲いかかってきた。自称――未来からやってきたアンドロイド――。そんな出会いに、一条秀真の運命は？これは優等生、エリート、そしてリア充中のリア充である主人公一条秀真が坂道を転がり落ちてゆく物語。ジャンルはSFチックなコメディだと思います。

ブローグ — 閉塞 — (前書き)

SF のつもりで書き始めたがただのコメディーになりました。序盤はSFチックです。次第にエロコメ。最後はまたSF? うーんジャンルはSFエロコメディということで。主人公はまたしても変態です。↑ごめんなさい。

プロローグ — 閉塞 —

なぜ、こんなことになってしまったのだろう。

こんな筈ではなかった。こんなことになるなんて、あの時は夢にも思わなかった。

取り返しの付かないことをしてしまった。後悔したところで始まらない。既に終わっている事なのだ。どうしようもない。あの時あすれば——などといったところで今更あとの祭りだ。

何故気づかなかった！

何故俺は、その可能性に気づかなかった。

ふっ、全く笑える。

俺は優秀だ。有能だ。天才だ。この世界を率いるエリートだ。などと自惚れていたなんて。自分の愚かさに全く気づく事なく、それでいて「自分のやっている事は正しい、世のために正しい行いをしている俺は素晴らしい、人類の救世主たる資格をもった有能な人間の崇高な使命を果たしている」などと。

そう、俺はまりにも無知だった。馬鹿だった。愚かだった。何も分かっていなかった。

まさか、そんな自分の行いが。自分の居る世界を壊し、居場所を奪うなんて。

平和で穏やかだった日常はもう何処にもない。

最悪を招いた。全部俺のせいだ。俺があまりにも愚かだったからだ。

ただそれだけ。

それだけで、俺は友も、恋人も、家族も、皆失った。残されたのはひとり薄暗いコンクリートの部屋の中、太陽の光を浴びることさえ許されぬ場所だけだ。

五年だ。気がつけば三十を過ぎていた。とうにおっさんだった。

眼の下にはクマ、無精髭、髪も伸びっぱなしだ。視力もとうに落ち、眼鏡なしでは何も見えない。ボロボロの衣服に、煤けた白衣を来て、俺は連日連夜、狭いコンクリートの部屋の中で、くすんだ緑色の電子基板を相手に格闘した。

運命は一縷の希を与えた。闇に射す一寸の光だった。いや、悪あがきだった。

それでも俺はそれにすぎるしかなかった。

運命を変えるため。

それは俺に残された唯一の選択だった。卑怯かもしれない、そんな事で俺の罪は許されはしないだろう。だが、それ以外、救われる道は無かった。

「どうか、無知で馬鹿だった俺の運命を帰ってやってくれ」

銀色のカプセル、人が一人すっぽり入れるくらいの大きさのカプセル。中央部にはガラスの窓を備え付けてあるが、今はガスが充満していて中身は見えない。

それを部屋の隅に立てかけている。見た目は日焼マシーンそのものだ。いや、日焼けマシンを改造して作ったのだから、そう見え

るの当然だ。そんな雑なもので、自分の行った過ちを取り戻そうとするのだから笑える。

「頼んだぞ」

マシンは何も言わない。当然だ。これは機械でしか無いのだ。

俺はマシンの隣に置かれた、小さなノートPCの画面を確かめる。

「2014/11/03/23:12 To 1999/11/03/23:12」

”ENTER” 俺はボタンを静かに押す

直後、マシンは脱水時の洗濯機のように、大きく揺れだす。そして放電を上げる。爆発音と共に、凄まじい光を放ち、マシンの中身は過去へ送られた。

「ふふ、これで俺もやつとお前たちのところへ行けるな」

俺の全身から力が抜け落ちる。

冷たい床に煽れた。ぼやけた視界に、ホコリっぽい床の上に転がったいくつモノ小さなネジが見えた。

少し眠い。ゆっくり休もう。

俺は瞳をゆっくり閉じた。

もう、思い残すことは、何も無い。俺の役目は十分に終えたのだから。

一九九九年、十一月三日。

僕、一条秀真、高校二年生１７歳は予備校での自習を終えて、閑散とするロビーを歩いていた。

時刻は十一時十分前。ビルを出ると、冷たい風が吹きつける。学ランのボタンを閉じる。昼間は暑く感じたそう寒くは感じなかったが、さすがにこの時間になると冷える。薄手のコートでも持つて来るべきだった。

少し駆け足になる。ビルとビルの間、飲食店のネオンサインは既に消えていて、頼りない街灯と通り過ぎる車のヘッドライトだけに照らされた薄暗い夜道を歩き、駅へと急ぐ。

携帯をポケットから取り出す。手にとって折りたたみ式の画面を開く。今年発売されたばかりの新機種でこういった折りたたみ式のものはまだ珍しい。

白黒の液晶画面には着信アリを記す表記があった。相手は「百里坂仁絵」だった。

「しまった」

思わず声に出した。今日、連絡すると約束していたのだ。だが、つい勉強に集中するあまり——それも大学受験ではなく、ロピタルの定理という大学レベルの数学をやっていたのだが、あまりに面白く、つい熱中するあまり——僕は彼女との大事な約束を忘れていた。彼女はおしとやかで、気立ての優しいお嬢様だ。そんな彼女が、こんなことで一々腹を立てることはないだろう。むしろ心配しているかもしれない。だから余計に思う。悪いことをした。

僕は一瞬コールを押そうと思った、携帯を閉じた。時間が時間だ。こんな夜更けにベルをならすのはいくらなんでも非常識だ。まして、彼女の父親は厳格だ。男からの電話というだけで不機嫌になるとい

うくらいなのだから。

「いいの。でもちよつと心配しちゃったな私」

なんて言う、仁絵の姿を思い浮かべた。

さらりとした長い黒髪を少しウェーブさせ、いつも後ろで大きなリボンを結んでいる、そんな彼女が、小顔でひとときわ際立つ瞳、潤ませて、桜色の唇を噛んで、僕の事を覗くのだ。

僕は後頭部を掻いた。実際に今、会っているわけでもないのに、照れてしまう。そんな彼女を、僕はたまらなく愛おしく思っているだ。

付き合つて二年近く。高校入学と共に付き合いだした僕らはいまだに手さえ口くに握らないが、こうして心は通じ合っている。

そんな彼女を心配させたかもしれない。そう思うと、ちよつと罪悪感に苛まれた。

列車の中、英単語帳に目を落としていた。内容は既に全部暗記している。1900語なんて、一年の内に覚えたいし、例文も去年までに完璧に暗唱している。英語で苦手なのは発音くらいものだ。当然入試には関係ないので、全く問題ない。

そう言えば、再来週校内模試だっけ。顔を上げた。不意に、揺れた中吊り広告が目に入った。

「ノストラダムスの大予言、真実実！人類滅亡は七月ではなかった！」と、週刊誌の仰々しい煽りを見て、ため息を付いた。さつきとは違った種類の。

全く、いつまで終末論で稼ぐつもりなのだ。そんなガセネタに踊らされて散在するバカもバカだが、それを飯の種にしているってのもなんとも滑稽だ。そんな事をしている暇があったら、この国の未来についてどうすべきか、それを特集して、国民に投げ変えてはどうなのかそのほうがよっぽどためになるし、それが本来、マスコミに与えられた役割というものだろう。

僕は単語帳を鞆にしまふ。短い黒髪（眉の上、耳にかからぬという校則を忠実に守った）を描き上げ、そして心のなかでつぶやく。「僕達が若い奴らが何とかしないと、未来は絶望的だ。だから僕は官僚になる。そして、この国を中から変えてやる。それが僕の使命だ」

本気でそう思っていた。だから、文転した。志望校を東京大学文科一類にしたのだ。夏休みまでは、IT業界に行くつもりで、理系を志望していたが、いくら技術を身につけても、それで世の中を変えられるとは思えない。一企業に貢献できても、社会全体にはその影響は及ばない。そう結論付けて、僕は進路を変更することにした。

列車が終着駅にたどり着く。ニュータウンに作られた、真新しいホームに降り立ち、エスカレーターで上がって、改札口をでる。テナントもまだ少ないガランとした駅舎から、街の人口に対して不釣り合いな片側三車線の大通りを歩いて、自宅を目指す。

駅からはそんなに離れていない。だから徒歩できている。駅前の駐輪場は有料だからだ。

このあたりは予備校のある都心と違って、車も殆ど通らない。街灯も少ない。女だったら絶対親に送迎させているだろう。最も、人口がまだ少なく、田舎とまでは行かないが治安を心配する必要はない。変質者が出たという話も聞いたことがない。

地図上にしか存在しない四丁目、近々マンションが建設されるらしい更地。遮るもんがないせいで風が余計強く吹きつける。自然と足が早くなる。

早く帰って、風呂に入りたいな。ああでも、風呂温めないといけないから、その間はコーヒーで我慢するしか無いか。

交差点、道路の向こうには最近立ったマンションが並んでいる。僕の家はその区画の端に立つ公営住宅だ。いつも横断歩道をわたっても家に辿りつけるが、信号待ちが嫌いだった。だからいつも、少し離れた場所にある歩道橋を使う。

歩道は更地に沿って続く。僕は歩道橋目指して歩いてゆく。歩道橋の階段を上がる。空き地と空き地を挟むよう作られたせいで、階段の白いタイルは土砂で汚れている。そのせいで気を付けないと滑ってしまふ。ゆっくり階段を上がった。

——バチッ！

何か音がした。何だろう？僕は顔を上げた。すると青白い光が見えた。

静電気の放電か？電線が切れたのだろうか。

歩道沿いの電柱を確認する。周囲の街灯を見渡しても停電した様子はない。切れた様子はなさそうだ。

不思議に思い、階段を急いで駆け上がる。橋の上に降り立って、周囲を見渡す。

対岸は団地の敷地だ。反対側は建設予定のマンションに続く道だ。まだ金網で閉ざされている。完成すれば四丁目を經由する形で駅へ直結されるらしい。

「何だ？」

金網の向こう。道の真中、何かが光った。

金網に近づいて向こうを見る。バチ、バチッ！青白い閃光が数回走る。静電気の放電のような光。それが光が数回、道の真中で。徐々に円が描かれる。人一人すっぽり収まるくらいの、円。いや、球体が出現した。

中央から閃光が走り何か像を結ぶ。

あまりの光に、驚いて一瞬まばたきした。

すると、そこには人影がポツンと佇んでいた。僕は目を凝らす。たしかに、この空き地では夜遊びをしている若者がたまにいるのだが。いや待て、さっきまで人なんて居なかった。どうやらそのたぐいではないらしい。騒ぐ声もしないし全くしない。

「????」

影がゆっくり近づいてくる。シルエットが少しずつあきらかになる。女だった。

僕は眉をひそめた。女は少しずつ歩調を速める。

「——成功。ターゲット補足。これより作戦を開始します」

はっとした瞬間、女は地面を蹴り駆け出した。そして金網に激突し、吹き飛ばす。僕は慌てて後ろへ下がるが、バランスを崩し、尻餅をつく。女は倒れた金網を踏み込んで近づいてくる。街灯がちらり女を照らす。

そこで改めて異様さに気づいた。

まず髪、とても日常生活では目にするものない、透き通った蒼光を反射しているような髪。長さは腰の少し上くらい。両サイドに天使の羽を模した小さな髪飾りをしている。

そして格好。全身が銀色、肌にぴっちりくっついた、胸の形がくつきり、はつきりしたプラグスーツに、軍服か警備員の服のよう、ポケットがたくさんついたジャケットを羽織って、が学生服のようなテクレカしたブリーツスカートを、両手にはギアのようなものがついた手袋、足にはニーソックスを、踵の部分に大きなネジがボルトのついたブーツを履いている。

まるで未来人とも言わんばかりの、あるいは高度に文明が発達した星からやってきた宇宙人のようなSFチックな格好だ。

映画の撮影？

いや、こんな田舎で、しかもこんな時間にありえない。

歳は自分とそれほど離れているようには思えない。少女と表現すべきだろうか。

僕は腰を上げ、少し後退りしながらも少女の顔確認する。うつむいていて表情は見えない

「ミッションを直ちに実行致します」

少女はつぶやく。

「——は？」

思わず疑問を声に上げる。だが次の瞬間、少女はぎらり光る何かを両手に構えた。

刃物だ。刃渡り三十センチ、先が尖っている。普通の包丁のように

背の部分が湾曲しておらず、背の部分で刃面へ切り落とされている。少女は、地面をける。僕の元へ一直線。そしていきなり斬りつけた。

ぎょつとして、身体を回転させ避けた。刃物が頬をかすめる。指を当てると、赤い血で濡れてた。キズは浅い。が、掠った感覚が殆ど無かった。切れ味が優れ散る証拠だ。だとすれば、こんなものをまともに食らってはひとたまりもない。僕は瞬時に理解した。

少女は回れ右九十度。そしてまた襲いかかった。僕はなんとかかわし、そして走る。

カンツ！と、金属音になる。少女の刃物が手すりを叩いた。

走りながら振り向く。少女がゆっくり方向転換をして、また地面をける。走って追ってくる。

なんだ！？何なんだあいつ！

何で襲ってくる？

何考えてんだ！！頭おかしいだろあいつ！！

そつだ警察！

慌てて携帯をポケットから取り出す。走りながら携帯を開こうとするが、うまく開けない。

「畜生！！カッコ付けて折りたたみ式なんかにするんじゃない！！」

諦めて再びポケットに仕舞う。全力で走る。団地の敷地に踏み込む。自宅のある三棟は反対側の一番端だ。駐車場の、車の間を蛇行し、フェンスを超えて、途中敷地を遮る道路を駆け抜け、三棟までだどりつく。家があるのは四階、息を切らしながら階段を一気に駆け上がった。慌てて鍵を開け、玄関経飛び込み、扉を即時に締め、鍵をかけチェーンをした。

ドアを背にしたまま、しばらく息を整える。

「何だあれ……」

先ほどの光景がフラッシュカットのように蘇る。水色の髪、天使の羽を模した髪飾り、銀色の装束。そして鋭利な刃物。

そういえばこの間、通り魔事件があつたよな。そのたぐいか？

覗き窓から様子を伺ったが、誰かが上がってくる様子はない様だ。ゆっくり、静かに靴を脱いで、部屋へ上がる。玄関の向かいが自分の部屋だ。明かりは付けない。薄明かりを頼りながら（家の前は小学校のグラウンドであるため外の光は弱い）部屋の奥の窓へ。ベランダへ出る。身を屈め、慎重に。鉄柵から下の様子を伺った。車だけで人影はない。どうやら追つて来なかつたようだ。部屋へ戻つて、ほつと胸を撫で下ろした。

翌日、通り魔には遭遇しなかった。今朝のニュースを注意深く観たが、近くで通り魔事件が起きたという報道はなく、登校中もあの少女は襲って来なかったし、そういう物騒噂は聞かなかった。

昨日と変わらぬ日常だった。家族と朝食をとって、電車に乗り、登校する。――名門私立、清王学院高等部、特進科、難関大選抜クラス二年A組――僕の通う高校まで何事も無く無事にたどり着いた。頬の傷がなければ夢だったのではないかと思えるほど平静だった。教室に入って席へ向かう。男子校であるため、男子しか居ない、むさくるしい教室。

「おい、どうしたんだよその傷」

「あ、ちよつとな」

話しかけたのは十三健介。小学校の三年時、この街に越してきた時からの付き合いで、PCが得意な理系志望のクラスメイト。夏休みまでは同じ方向を目指していた良きライバルだった。

彼は結構チャライやつだ。校則を無視して髪を若干染めているし、制服もちよつと来崩していて、シャツを出している。そんな訳で教師受けはあまりよくない。しかし、頭はずば抜けていい。大して勉強しているわけでもないのに、成績は常に上位10番以内だ。

「ようよう、一条。この間の校内模試またトップなんだって？ すごいな」

と、そこへ千宮芳雄が割り込んできた。彼とは高校になってからの付き合いだが、常に成績を競い合って、それでいて一度も僕に勝たない癖にやたら突っかかってくる嫌なやつだ。

医者の家系で、志望は東大理科三類だった。成績も校内では僕に続く。そしてなにより美形だ。腹が立つくらいあい端正な顔立ちをしている。校則で髪は耳の上、眉にかからぬ程度と決められているのに、はやりのスタイルをしている。が、教師は咎めない。親が物凄

い寄付金を収めているかららしい。金持ちで、成績優秀、そして美形。とにかくムカツクやつだ。

どうやら僕が志望を変更したことが気に入らないらしい。僕と成績競争ができなくなった事を、勝ち逃げしたと、目の敵にしているのだ。だから試験があるたびにこうして絡んでくる。朝っぱらから、わざわざ隣のクラスから。最近はい前にもまして余計に突っ込んでくる。本当に鬱陶しいやつだ。

「別に」

僕はそっけなく返答する。十三は助けてくれない。そういやコイツが千宮と話しているところを見たことがない。千宮は彼のことを下級市民と言っていた。十三もいけ好かないやつだと思っているのだろう。彼は、興味なさげにカバンの中を探り、漫画を取り出した。「さすがだな。これだったら理三も余裕だろ？」

「僕は文系なんだ、理系の君には敵わないよ」

「そんな事ないだろ。何だったら今から理系に戻れよ。そうすりゃ、お前も国内最難関を目指せるぜ。そのほうが将来のためだろ？」

「生憎、そっちには興味ないんだ。もう」

「そうか、そりや残念。けどよ百里坂さんの両親はそれでいいって言うのか？まああの家は弁護士の家計だからな、法学で後を継いでくれりゃいいと思っているんだろ？が、ああでもあの家、あんまり頭の良くない兄がいるんだってな。確か去年浪人して国立すべって結局今、某有名私大に通っているとか、同じ方向で、自分の息子より学歴高いと鼻につくんじゃないか？」

「あいつのことは関係無いだろ。それに僕らはまだそんな関係じゃない」

こいつも、仁絵に気があるらしい。僕の事をライバル視するのはそれもあるのだろう。だからわざと言ってやった”まだそんな関係じゃない”と。

「そんな関係じゃない……っか」

千宮は舌打ちをする。腕時計を確認して、教室を出ていった。

やれやれだ。毎回毎回、本当にご苦労さんだ。

「ところでよ。あれはどうなった？昨日メールしたんだぜ」

千宮がいなくなつて、十三は漫画をしまい僕に話しかける。

助け舟くらい出せよ。

「ああ、ごめん。昨日はちよつと遅かつたから見てないや」

「そうか、まあいいけど。調子はどうだ？」

「やっぱ難しいな。音声の認識がどうもうまいかない。テキスト入力にしたほうがよくねえか？」

「それだつたらあんまり意味ないだろ」

「だよな」

「まあマツトのことだからなんだかんだでやってしまつんだろうけどよ。期待してるぜ」

マツトというのは僕の中学時代からのあだ名だ。「秀真」をひっくり返してマシユー。英語圏でマシユーはマツトの愛称で呼ばれることから、そうなった。

よく考えると、いや、よく考えなくても、とてつもなく恥ずかしいあだ名だ。

「でよ、お前なんで文一なんだ？今時ITだぜ？アメリカのドットコムバブル知つてんだろ？これからはコンピュータの時代なんだし、お前の腕なら十分プログラマーとしてやっていけんだからさ、官僚志望なんてやめて俺と一緒にさ」

「お前も千宮と同じ事いうんだな」

返事はそれだけしかなかった。そうかもしれないが、それで何が出来るっていうんだ。たとえ”人工知能”なんてものが作れたとしても、それで世の中の構造が変わるわけじゃない。

とても鼻につく気取った言い方をするけど、要するに、所詮僕らは人間はアリストテレスがいうよう「社会的動物」なんだ。だから、社会の仕組み、基板、つまるところ法律を変えない限り、何も動かない。技術的なイノベーションでは何も変わらない。それが僕の持

論だった。もちろん、プログラマー志望である友人に向かってそんなことは言わない。

「まあ、趣味程度では続けるつもりだからそのへんは心配するなよ」「ホントか！助かったぜ！お前はやっぱりいいやつだな！親友」

「ああ、ありがとうよ」

十三は立ち上がり、僕の肩に腕を回して耳元で囁く。

「そうそう。お前に頼まれてたやつ」

十三はカバンにB5サイズの少し厚みのある封筒を素早く押し込める。チラリ見たがそれが何か瞬時に理解した。

「しかしお前もマニアックだよな。正直この趣味は理解できねえぜ」「馬鹿！こんな危ないもの学校に持ってくるんじゃないねえ！」

僕は声を潜めていった。はつきり言って、かなりヤバイ物だった「我が家にはエージェントの影が忍び寄っている。よってこいつの長期保管は難しい。誤解されると嫌だからな」

「せめて、予備校で渡してくれよ。これを一日持ち歩かないといけない僕の身にもなってくれ、命が縮む思いだ」

「俺だってこんなヤバイものいつまでも手元においておきたくないぜ。お前の頼みだつて言うから、わざわざ調達したんだ。ちつとはこつちの事情も考えてくれよ」

「そうだけどさ」

チャイムがなる。じゃあな。十三は自分の席に戻ってゆく。教師がやってきた。ホームルームが始まる。カバンの中を、誰にも観られないよう、慎重に確かめた。

確かにヤバイ物だった。見つかったら即人生終了だ。こんなものを預けやがって。全くとんだ悪友だ。

出席の後、宗教系私立高校特有のお祈りタイムが始まる。その間考える。続きのコード、十三からの預かり物の保管場所。仁絵への連絡。そして昨日の通り魔。

ったく。なんなんだこの混沌とした状況は。

放課後。

今日は予備校の授業は無い。いつもなら予備校の自習室に直接向かのだが、昨日、仁絵から連絡をもらっていて、返事していなかったでそれが気がかりだった。なにより、こんな危ない物を抱えて外をうろつくのは危険だ。今日のところはおとなしく家に帰るのが懸命だ。僕はそう判断して、友人たちは皆、一斉に予備校に向かうなか一人帰路に着く。

電車の中で考える。仁絵は今日、家に居るだろうか？彼女と受験生だ。家に居ないかもしれない。まあ、夕方までに電話すれば彼女の父親が出る可能性は低い。おばさんに伝言を頼んでおけばいいが、怒っていたらどうしよう？

駅を出て夕暮れの道を歩く。地図上しか存在しない空き地にそう、無駄に広い歩道。まだ明るいというのに、人通りの少ない道を歩いて、自宅を目指す。

ほほの傷を触れる。昨日の女は一体何だったんだ。

交差点に差し掛かって、歩道橋へと続く道の先を眺める。なんとなく、歩道橋は避けたい。少し大回りになるが、違う道で帰ろう。そう思つて、信号を待った。

「お待ちしておりました」

背後から声がした。ぎょっとして振り向く。するとそこには……昨日の少女がいた。

昨日と同じ、SFチックな未来的な銀色のファッションをしている。夕陽に照らされて輪部がオレンジに染まっているものの、蒼、いや水色というべきだろうか。けれどもキラキラと輝く長い髪を揺らしながらこちらへ近づいてくる。

「申し訳ございません。日没を待つべきでしたが、電力が後残り僅かです——」

少女は告げる。抑揚のない声だった。誰と話しているのだろうか。僕は眉をひそめる。

少女を一瞥する。昨日は暗くて見えなかったが、人全体的に綺麗に整った顔立ちをしていて、なかなかの美人だった。いや、整いすぎている。むしろ機械的だ。本来なら美人というよりもむしろ可愛らしさを感じさせるタイプかもしれないが、表情が、整いすぎている。というか、造物のように思えた。その格好のせいかな、まるで人形のようにさえ思えてしまう。なにより、その光彩が、瞳が青白く光っているのがとても非人間的だ。そんな印象を与えた。

少女は、ゆっくり歩み寄る。僕は振り向いたまま固まって動かない。

「——ですのでミッションを直ちに実行します」

言って、少女は刃物をギリリ光らせた。

「!?!」

間髪入れず少女は刃物を突き出す。慌ててスクールバッグを差し出した手にする。

カバンは切り裂かれる。教科書、参考書、そして十三に預かった”物”が、散乱する。

マズイ。教科書には思いっきり名前が書いてある。しかも生徒手帳も入っている。このままでは名門私立清王学院三年A組一条秀真が、持ち主だと判明してしまう。第三者に知れ渡ってしまう。そうなれば生命の危機だ。

慌てて拾い上げようとした。だが少女が、それを踏んだ。カバンを拾っても無駄だ。教科書があちこちに散乱しているのだ。自分が関わったという証拠隠滅にはならない。仕方がない、ここは一端逃げるしかない。僕は”物”を諦めて踵を返す。そして走る。

少女は、追ってくる。物騒な刃物を両手に握ったまま追ってくる。全力では走る。

「ななな、何なんだお前は！」

フェンスを超えて、空き地へ入った。若干、高台になっている。三メートル程の高さ。むき出しの土の坂を必死に駆け上がり四丁目へと逃げこむ。

少女はフェンスをそのまま弾き飛ばした。そういえば昨日も、金網を吹き飛ばしていた。見た目は華奢なくせに脚力は相当にある。いや、おかしいぞ！？いくら何でもコンクリートに突き刺さった鉄柵だぞ。化け物か！

くそう。逃げるしか無い！舗装されていない更地の地面を蹴り、そして走る。夏までサッカー部に所属していたのだ。だから体力には自信はあるし、それなりに速く走れる。全力で走れば、男と女。追いつかれないはずだ。

しかし、その目算は大きく外れた。かなり走ったというのに、少女はまるでスピードを落とさない。

対して、僕は息が上がり始める。建設途中の道に差し掛かった。先をいけば、団地の敷地へと続く歩道につながる。そのまま家を目指して走る。フェンスは倒されたままだった。そのまま駆け抜け、歩道を渡り、団地の敷地へ。少女は未だ追ってくる。

どうやらただの通り魔ではなさそうだ。そういやさつき「お待ちしておりました」とか言ってたな。てことはあれか、あいつは僕を狙って？でも何故だ！

団地の敷地に入る。自転車置場を通り過ぎ、植木に隠れるよう走り続ける。このまま端まで走れば家にたどり着く。

しかし！

「今日は逃しません。もう時間がありません」

行く手を阻むよう、少女が立ちはだかる。

先回り？一体何故！？

地面を蹴り弾丸のスピードで少女が突進してくる。両手の刃物を前に付き出して。そして、斬りつける。学ランが破けた。冬場だったのが幸いだ。夏だったら確実にやられていた。

僕はちぎれた学ランを脱ぎ捨て、マフラーを投げつける。視界を遮って、逃げる。

「畜生！！」

駐車場の車を縫うようにして、隠れながら逃げる。警察だ。警察に通報しよう。そう思いつい携帯電話を取り出そうとする。しまった。カバンの中だった。

「無駄です。私にはあなたの場所がすぐわかります」

セータを投げつける。少女はそれをあっさり払いのける。

「二度も同じ手は食いません」

刃物が飛んできたが、狙いが外れた。少女はゆっくり方向転換して、また追ってくる。

その隙にまた逃げる。なお、追ってくる少女。しかも早い。既に息切れして、速度の落ちる僕にあつという間に追いつく。やけくそにワイシャツを脱ぎ、中に来ている綿シャツも脱ぎ、それらを投げつけながら上半身裸のになってひたすら走り、逃げる。

「大人しくして下さい。そうすれば苦しまずに済みます」

「冗談じゃねえ！なんなんだお前は！」

背後から刃物が切りつける。

ベルトを切断した、ズボンがずり落ちる。足がもつれそうになる。靴ごと脱いで捨てた。

ついにパンツ一丁になった。僕は白のブリーフを愛用している。したがっていま、白ブリーフ一枚の状態になってしまった。

マンシヨンの敷地を精一杯、全力で走る。階段の下で井戸端会議を敷いてるおばさんが黄色い悲鳴を上げる。車のボンネットで日向ぼっこしていた三毛猫が毛を逆なで威嚇する。

敷地の端までたどりついた。僕の家のある棟だ。

階段を駆け上がる。最後の力を振り絞って、四階までがり、家の玄関へダイブ。

ドアを背に、覗き窓で様子を伺う。息が整うまでしばらく待っていた。追ってくる様子はない。うまく巻いたか。昨日と同じだった。まるでデジャヴだ。

少し落ち着いて、靴を脱ごうと足を拾い上げる。しかし靴下だけ

だった。

しまった！パンツ一丁（白ブリーフ）、靴下。親に見られたらヤバイ。早く上がらないと。

「お、お兄ちゃん……」

廊下に、妹がいた。一番下の妹。七歳年下の十歳、小学三年生の女の子、一条理沙。栗色の髪を二つくりにして、クマのぬいぐるみを抱いている。パチリと大きな瞳で不思議そうに僕を凝視した。

「ママー！お兄ちゃんが露出狂！」

叫びながらリビングへ消えてゆく。

「露出狂って。そんな言葉いつ覚えた……」

しかし、確かに露出狂だ。

と、とにかく……母親が飛んでくる前に、部屋へ急ごう。

部屋へ上がって安堵。昨日と同じならこれ以上襲ってくることはないはずだ。

「しかし一体何だったんだあれは？昨日といい、今日といい……」

僕に個人的な恨みでもあるのだろうか。

いやしかし、男子校である学校はもちろんのこと、予備校でも、中学の時の同級生にもあんな奴は居なかったし、第一僕に恨みを抱く人なんていないはずだ。なぜなら僕は優等生だからだ。素行の悪い不良連中とはわけが違う。

そんな事を考えながら服を着る。それから、一応念のためベランダから下の様子を確認しておく。窓へ近づく。カーテンを開ける。そして、ベランダへ出ようと、鍵を開ける。

すると、窓の外、ベランダの向こう。少女が居た。浮いている。いや、正しくはジャンプして、この高さまで飛んできたのだ。少女はベランダのフェンスに手をかけたところだった。

「嘘だろ？四階だぞ！」

頭が真っ白になった。まさに思考停止。一体なにがなんだか分か

らない。

少女はベランダに降り立った。慌てて、ベランダの窓を施錠するが、遅かった。少女は窓を開け放ち。部屋へ上がってくる。ご丁寧、ブーツを脱いでから。

「予想よりバッテリーの消耗が激しかったようです。日暮れを待つべきでしたが、急がないと活動停止します。ですので申し訳ございません。只今実行させていただきます」

少女が、両手に持った刃物を振りかざす。

「ちょ待ッ！」

左手の刃が壁に刺さる。少女の手から離れ、床に落ちる。見るとそれは包丁のようだ。ただし、その辺のホームセンターで売っているような安物ではなく、伝統工芸品という感じの高級感漂うものであった。

「切付柳刃と言います。主に関西で使われる柳刃の包丁で、先端を一寸カットすることにより引きやすくなっております。刺身を切るにはうってつけの包丁です。切れ味抜群。痛みを感じるまもなくあの世に行くことができます」

少女は説明すると同時、包丁を拾い上げる。

「安心の Made in Japan。今回は二本セットでお値段なんと39800円（税込）！！更に今回はまな板をお付けして――」

「いらねえ――！」

少女は包丁を突き出す。僕は参考書や教科書を投げつけながら後ずさりする。

幾つかあたたたが、少女はまるで痛むようすもひるんで目を瞑る様子もなく、ゆっくり近づいてきて、一端引いたの後、また包丁を突き出す。

「おおおお、お前なんなんだ！」

「一条秀真。あなたは死んでもらいます」

「な、何故僕の名前を知っている！お前何者だ！自己紹介ぐらいしろ！！」

「これは失礼しました。申し訳ございません」

「はっ！？」

何故か少女は、包丁をジャケットのポケットにしまう。そして、銀色のスカートの端を両手で摘むと少したくし上げ、それはすなわち、その細くて白い膝が、太ももが、少しずつ顕になり、あと少しでパンツが見えてしまうという、ぎりぎりのラインまでスカートが上がり、それはそれで本当に優美で、美しく、芸術的と言うか、なんとというか、煌煌とエクスタシーを感じさせる、なめらかな曲線で、僕は包丁で命を狙われているという、こんな異常な事態をすっかり忘れて、ついうっかり、その艶めかしい曲線を凝視してしまったのだった。

「これ以上は有料です」

「いくら？」

「二千元」

僕は本棚の上に置かれた財布を手にとったそして中身を確認した。

夏目漱石（千円札）が一枚しかなかった。残念。

「いや、いい」

「かしこまりました」

少女は軽く頭を下げる。そして告げる。

「私はタミネ・LS・エール。機種名PC-9821 LS150
エール。正式名称、プロジェクトタミネ初号機 エールLS150
/SS model A・零式。通称名、タミネ。そして私はあ
なたの人生を強制終了させるため2014年の未来から派遣されま
したアンドロイドです」

「はい？」

ギャグのつもりだろうか？ネタなのか？あるいは頭が本当にイカレている狂気犯罪者なのか？

” あなたの人生を強制終了させるためにやってきた”
ターミネイト

とてもまともな思考の持ち主とは思えない。どう考えてもヤバイやつだ。一刻も早く、この自体を打開しなければ。

しかし、それにしても何故、僕の名前を知っている？一体何者なんだコイツは……

「では続きを」

自己紹介を終えて、少女は、端をつまんだ指を解く。銀色のスカートがニュートンの法則に従い、ゆっくり落ちてゆく。優美でなめらかな曲線が、銀色の幕の向こうに消えてゆく。そして、自称アンドロイド少女はジャケットのポケットに突っ込んだ包丁を取り出すとする。

「チョチョチョ！ちよつと待て！」

「何でしょう？」

「何でしょうじゃねえ！お前は一体何なんだ！」

「私はタミネ・LS・エール。機種名——」

「さっきと同じ事言ってんじゃねえ！なぜ僕に付きまとうんだ。そしてお前は一体何者なんだ。あ、自己紹介はもういいぞ。お前が何の目的でこんな真似しているのか聞いているんだ」

少女は、手を止める。

「私はあなたの命を奪うためにこの時代に派遣されました」

言い終えて、少女はまた包丁の柄を握ろうとする。

「待て待て！まだだ！！まだ質問は終わっていない！」

「かしこまりました。なんなりとお申し付け下さい」

どうやらアンドロイド、つまりロボットキャラを本気で演じてい

るらしい。だから質問には答えなければいけない？そういう設定なのか。なら助かった。こうして会話をしている限り、コイツは攻撃をしてこないのだから。

かもしれない……

「君、アンドロイドだといったな。人間じゃないのか？だったらその証拠を」

「かしこまりました」

自称アンドロイドの少女は、ジャケットを脱ぐ。

肌にぴっちりくっついたプラグスーツが顕になった。胸の輪部が強調される。鎖骨がくつきりして浮かび上がっており、肩、二の腕肘、そしてくびれ、へその窪みが、妙なエロさを感じさせる。

学内ナンバーワンの優等生。高校二年生。男子校にしながら、県内一のお嬢様学校に通う、百里坂仁絵という美人の彼女を持つこの僕が、しかし手を握る以上のことは未経験な一条秀真は深くにもたつたこれだけの微エロで顔を赤面してしまうのだ。鼻血が出そうになった。

すこし視線をそらすふりをしながらも、横目で凝視する。

少女は右腕の、ちょうど肘のあたりから、プラグスーツの一部、いや、手袋と一体となった部分だろうか。それを脱ぎ、肌を顕にする。

綺麗な肌色だ。色白で、きめ細やかな、肌。モデルの腕、理想的な、けれどもやはり何処か造物ぽさを感じさせる細腕だった。

少女は僕に魅せつけるよう前へ差し出す。そして左手で先ほどの包丁を持つと、

「ちよつと待って何をする！」

「某映画ではこうやって表皮を剥がし、金属によって作られた骨格を露見させることにより、自身が造物であることを証明してしましたが、なにか問題でも？」

いや、たしかにそんなシーンはあったが、だからといってこの場で自傷行為を黙認する訳にはいかないだろう。いくら相手が自分を

殺そうとした狂気だとしても。

「いい、分かった。君がロボットだってことは十分理解したからそれはやめろ！」

とりあえずその設定は飲み込んでやる。

そのかわり利用出来るだけ利用してすきを書いて逃げる！

「いえ、私はロボットではなくあんのロイドです。ロボットに意思はありませんが、私には明確な意志がございますので」

「そうか、わかった。アンドロイドだな」

「御理解いただけて幸いです。ではミッションを再開します」

「いや、待て！そうだ。どうして僕の命を狙うのかその理由をまだ聞いていない。理由も聞かずに殺すなんて相手に対する礼儀がなっていないとは思わないか」

「いや殺すのに礼儀もへつたくれもないが……」

「それは失礼致しました」

こんな苦し紛れにまともに付き合うなんて、案外こいつ馬鹿かもしれないな。

いや、アンドロイド設定だからか？

「あなたが殺される理由についてですが、開発者はこう述べております”一条秀真が存在することでみんなが不幸になる。こんな奴はいますぐ抹殺されるべきだ”と」

「僕が何をしたって言うんだ？」

「開発者はこう述べています”お前は、友を、家族を、恋人を裏切り、世界を捨てた”」

「まるで話が見えないぞ！い、意味が分からない。理解不能だ」

「と言われましても……。開発者がその質問に対してはこう答えると予め指定していますから」

「そうなのか、じゃあそうだ。そもそも、君が未来からきたって、その証拠がないじゃないか。それを見せてくれ」

「申し訳ございません。もう時間がありません。ミッションが最優先事項に指定されている為、直ちに実行に移します」

少女は包丁を僕につきつける。

「大人しく死んでください」

「ままま！待て！冗談だろ」

「冗談ではありません！本気です！」

そっけのないのは告白のセリフで言っただけだった。

振りかざす包丁。僕は一步、一步後へ下がる。部屋の戸の前まで追い詰められた。

と、その時部屋の戸をノックする音がした。

「ちよつと、秀真？秀真？誰かいるの？」

母さんの声だった。そうだ。警察へ通報してもらうチャンスだ。ここは助けを――いや、だめだ。リビングには妹もいる。母さんを危険な目に遭わせる訳にはいかない。ここは自分で乗り切るしかない。

「う、ごめん電話中。邪魔しないでくれ母さん！」

「あら、ごめんなさい」

うまくごまかした。目の前の電波少女を警戒しながら、部屋の扉の鍵を締める。

ごくりと唾を飲み込んだ。

少女はまた包丁を勢い良く振り下ろした。僕のジーパンが切れてしまった。ブリーフパンツが頭になる。僕は上の服を脱ぎ捨て、少女に投げつけ、その隙に包丁をうばいとろうと、彼女の手をつかんだ。

だが、しぶとい。

いや、少しも痛がっている様子がないのだ。僕は愕然とする。少女はもう片方の包丁を振り上げた。僕の脇腹めがけて、肘を引いて、そして一気に、突っ込んでくる。

気づいたときは、もう遅かった。僕の脇腹に、包丁が突き刺さる。

赤い血がたらり。

「う、あ……」

少女の動きが突然止まった。

包丁はかろうじて皮膚に触れているだけで、まだぐさりと刺さっていない。ちよつと掠った程度の傷だ。間一髪。というところだった。

「も、申し訳ございません。電池……切れです。これ以上の戦闘モード維持は不可能です。支給受電を御願いたします」

少女が包丁を床に落とした。僕はそれを見逃さない。足で払いのける。少女が倒れかかってくる。

僕は両手で抱きとめた。柔らかい腕だ。細くて強く握り締めると俺てしまう位相な華奢な作りをしている。とても、あんな物騒なものを振り回していた腕とは思えなかった。

「じゅ、充電を」

少女は別のポケットから何かを取り出す。電気のコードだ。中央には暑さ二センチのCDケースほどの箱がついており、一端にはマッサージ機の電極のようなものが付いている。

「背中の方スナァを下ろして下さい」

「ななな。何を言っている！」

「今すぐ充電をしてください。さもなければ、ミッションを完了出来ません」

ちよつと待て！何を言っている。ミッションって、僕を殺すことだろ？充電が、なんなのか、何の意味があるのかしらないが、何でこの僕が、僕を殺そうとしている変な女の言う事を聞かなければならないのだ！

「充電って、お前は何をする気だ」

「命令に従い、あなたを殺します」

「んなわけねえだろ！何で殺されるために、殺そうとしているやつ
の言う事を聞かにならんのだ！」

しかし……少女はクローゼットの方を指さす。そして言う

「あの中に、ノートパソコンがありますね」

「ああ、だからなんだ。ていうかなんでそれを知っている？」

「新手のストーカーか？」

いくら僕が成績優秀で将来有望なエリートだからって、こんな狂
気じみたストーキングはゴメンだ。

「C:¥Windows¥system32¥Win9x¥systemfiles」 このディレクトリに、システムファイルに偽装された、あなたにとって重要なファイルが隠されており、このフォルダは隠しフォルダ設定になっており、暗号化もされています」

「何故それを知っている！？」

そこには、十三と作った開発中の人工知能プログラムのソースコードが隠されている。

「コイツまさか！」

「今すぐ充電してください。さもないと、今すぐあなたを殺します。ちよっと雑な方法になりますが」

「意味が分からないぞ。それって、今すぐ殺されるか、後で殺されるかの違いだろうが」

「そうですね、今すぐの場合、ここを爆破します」

と、少女はまた別のポケットから、緑色の筒が四つ連なった物体をとりだした。そのひとつからは短い線が伸びている。すなわち、ダイナマイト？ 爆弾？ そして導火線。

「ライターを取り出す少女。」

「ままま、待て！ 爆弾！！」

「ここを爆破することによりミッションを達成いたします」

「バカなことは止める！ 警察呼ぶぞ！！ いい加減！」

「ご心配なく、すぐ終わります」

「ははは、いくらなんでも自爆って！？」

「私はアンドロイドです。ミッションを必ず達成する、使命があります。ですのでたとえどのような手段を以てしてもあなたを殺し

ます」

やはり警察に通報すべきだろう。

どう考えてもまともなやつではない！しかし、爆弾に火をつけられたら……

仕方がない。ここは相手の言うとおりにして、好機を伺おう。

油断をした隙に爆弾を取り上げ、逃げるのが妥当だ。

「分かった何をすればいい？」

「背中の肩甲骨あたりに、その電極を貼って下さい。続いて、コンセントを指して下さい。一晩ほどで充電は完了いたします」

背中のファスナーを下ろす。少女は髪を長い髪を退ける。背中が
頭になる、

白い肌。僕はゴクリつばを飲み込むんだ。

「なっ？」

衣服と同じ銀色のブラジャー。ホックが指に触れて、思わず鼓動が早くなる。男子たる部分が反応しようとするが、必死で考えないよう、意識しないようにして制御する。

畜生！！こんな時に欲情している場合か！！

電極を貼り付ける。冷たい肌が触れる。表面は冷たく。少し触れていると肌の温かみが伝わってくる。

「こ、これでいいのか」

「はい、ありがとうございます」

マッサージ器の類だろうか。手の込んだいたずらだろうか。しかし、だとすればこの子は、こんな真似をして一体は何がしたいのだ。冗談やいたずらにしては達が悪すぎるぞ。

「ミッションは必ず実行致します。すみませんでした」

少女は振り向いて何故か頭を下げた。とても申し訳なさそうに。
いや、しなくていいんだけど。

「ミッションって、君は何故そんな事をするんだ」

「それが、私がこの時代に送り込まれた理由ですから、必ず実行いたします。ご安心下さい」

安心できねえよ！

少女が突如、プラグスーツを脱ぎ始めた。手袋を外し、シャツの部分も全部脱いで、すなわち、前から見ればブラをしているとはいえ、高校男子にはかなり刺激的な格好になる。

「ちよちよちよ！何をするんだ」

「この状態では少し休みにくいので」

振り向く。少女は、恥じることもなく振り向く。

見たい気もしたが、見ようとしたが、慌てて身体を百八十度回転。視界に入らないようにする。

僕には仁絵という、彼女が居るのだ、他の女の子の裸を見るなんて絶対ダメだ。

「いいいい、いいから服を着ろ！そんな格好で男の前で恥ずかしく無いか！」

いや、こいつはアンドロイドなのだ。羞恥心なんて感情は……おそらく持ち合わせていないのだろう。本当に？

「いつものことではありませんか」

「はいっ？」

布団をめくるの音がする。何？

首だけ振り向いて確認すると、少女が勝手にベッドになだれ込んでいた。

「お前！何している」

「電源を切っておいたほうが速く充電できますが、起きていたほうがよろしいのでしょうか」

と言って、少女は起き上がるうとする。布団がずり落ちる。肩が、鎖骨が、そして胸が

「ああああ！やめ！やめ！寝ろ！いいから寝てろ！」

「はい、かしこまりました」

少女はベッドに再び横たわる。そして瞳を閉じた。微妙に横が開いているような気がする。何を考えているんだ？コイツ。

僕はその後数分間ベッドの側で立ち尽くして彼女の寝顔を見ていた。起きる様子はない。

襲ってくれって言ってんのか？

少女は目をつむったままだ。僕は恐る恐る近づく。とても柔らかそうな、薄紅色の唇が、視界の真ん中に飛び込んでくる。少女はピクリとも動かない。

少し濡れた唇。本当に柔らかそうで、

く、キスしたい！

と、僕を誘惑する。

顔を近づける。鼻と鼻がこすれあいそうなくらい近づく。だが、まるで動かない。いや、吐息すらない。

あれ？おかしいぞ。鼻から息が出ていないではないか。

眠いつて居るにしても静か過ぎる。いや、死んでいるみたいだ。さらに顔を近づける。ゴクリ、つばを飲み込んで、唇と唇が触れ合うまでほんの数センチ。

——ピンポン——

不意にドアチャイムが鳴った。

僕は飛び上がった、驚いて、後ろに倒れる。少女は起きない。

「はい、はい、ちょっと待って」

母さんが廊下を走って玄関へ向かう足音

僕は慌てて別の服を引っ張り出し、それから少し部屋の扉を開いて、玄関の様子を伺う。

「たっただいまー！」

そこにいたのは、茶髪のポニーテール。既にかなり背が高いというのに、はやりの厚底ブーツを履いた。姉、一条理穂がいた。

なんだ。姉貴か。僕は安堵して、扉を閉めようとした。

「お邪魔します」

涼やかで可憐な声が聞こえた。

「お久しぶりですおばさま」

「あら仁絵ちゃん。お久しぶり」

仁絵だった。慌てて、部屋を出て扉を締める。

「ひ、仁絵……。どうして、急に、今日？なんで？」

「そこで偶然あったのよ。だから連れてきちゃった。あんたこそどうしたのよ。その慌てよう」

「は？そりゃ急に來たらびっくりするだろ」

「ごめんなさい秀ちゃん。やっぱり迷惑よね」

仁絵は、氣まずそうに、申し訳なさそうに言った。

それはとてもとても愛おしくて、可愛らしくて……。僕はたじろいで「いや、そんなこと……ない」と言うのがやっとだった。

「さあさ、さっさと上がって。ご飯できているんだから」

「そうそう」

姉と母に促され仁絵は少し迷っていた様子だが、僕がうなづいたので彼女はようやく部屋へ上がった。

「で、でもどうしたんだよ急に」

細い廊下で肩を並べ歩きながら聞く。

「電話通じないから、心配になって……」

「ご、ごめん……。昨日電話できなくて。今日も携帯忘れちゃって、家に帰ってみたら電池切れだったんだ。いま充電中」

とりあえずごまかした。誰か、落とした携帯やカバンを警察に届けてくれているだろうか。

いやまで、警察はまずい。あれが一緒に入っているのだ。運良くあの場所にとどまってくれていればいいが。状況からして今抜けだす訳にはいかない。僕はため息を付いた。

そんな訳で、僕は家族と（と言っても父親だけは仕事でいないのだが）、久々に家にやってきた仁絵と共に夕食を取ることにした。ホワイトシチューと炊き込みご飯という謎のメニューだった。二つとも昨日の残りものだ。息子の彼女が着ているというのに、この怠惰は少し許しがたい。というか彼女の家は父親が弁護士をしているブルジョア、つまりお嬢様なのだ。こんな庶民料理、恥ずかしい限りだ。

リビングの食卓に、五人は並ぶ。姉の理穂、隣が仁絵、そして向かいが僕、その隣に一番下の妹、理沙が、間に母が座る。

「仁絵ちゃんが来てくれるなんて久々ね。最近全然来てくれないんだもん。ひょっとして秀真振られたんじゃないかって心配だったのよ」

姉がからかう。仁絵は少し照れて、スープを一口含んでから、

「秀ちゃん忙しそうだから……」

と小さくつぶやいた。そんな様子に僕は思わず……

「ゲフォ、ゲフォッ！」

咳き込んでしまった。

「ぼ、僕は忙しくないよ。別に……」

だから、いつでも来てくれていい。そう言いたかった。けど、それ以上の言葉がでない。

仁絵をうちに誘えないのは、なにより、僕のプライドが許さないからだ。

プロレタリア階級（庶民）でしかない一条家が百里坂家のお嬢様を食事に誘うなど言語道断というものだ。だから僕は一刻もはやく、出世して、ブルジョア階級になって、彼女にふさわしい男になりたい。そう思っている。

「ところでさ、あんた達何処まで行つたの？もうしたの？」

「ばばば、バカ！するわけねえだろ！」

仁絵は顔を赤らめて視線をそらす。理沙はきよんとして意味が分からないと言う顔をしている。母親は食事中の話題じゃないと姉の頭をコツンと叩いた。

「ごちそうさま」

仁絵は丁寧の手をあわせて母に礼を言う。こんな不味そうなかにも庶民料理だというのに、とても美味しそうに食べた。できたお嬢様だ。さすがだ。こんな彼女こそ、未来の日本を担う、エリート一条秀真にふさわしい。僕は心底自分の彼女を誇った。

「デザート部屋に持つて行くから」

母さんがそう言つて、僕らを部屋に行くよう促す。

「子供がいるんだから静かにするのよん」

「しねーよ！」

と、いった所で何か大事なことを忘れていることを思い出した。そうだった。僕の部屋には得体のしれない”自称未来からキタアンドロイド”が眠っているのだ。こんなおかしい状況、よく平然と食事なんてしていたな。我ながら感心する。

いや、そんな感心している場合ではない。

マズイ！非常にマズイ！

部屋で得体のしれない女が眠っている。自称アンドロイド。人間ではない——たぶん——

とはいえ、この状況を、仁絵に、家族に見られたら確実にアウトだ。

しまった！仁絵が来てくれたことが嬉しくて、ついほのぼのシーンを演じてしまったが、それどころじゃなかったのだ。

「ひ、仁絵……ええと僕」

駄目だ。何を言えればいいんだ。部屋に来るな、なんて言える訳が

ない。言い訳、とにかく言い訳を！

そうだ勉強。来週もしなんだ。だから勉強しなくちゃいけない。そう言つて、いや、それだと恋人より勉強のほうが大事みたいじゃないか。そんないいけ好かないガリ勉野郎は演じられない。くそう。どうすればいい。何をどう言えばいいのだ。

畜生、あんな訳のわからない女を部屋に入れるんじゃない！いや違う。部屋に入れたんじゃない。ベランダから押し入つてきたのだ。そうだ、ここは四階。どうやって？やっぱりあいつは人間じゃない。人間に、そんな真似は不可能だ。一つ下の階からだてよじ登れるものじゃない。

だから大丈夫だ。あれはアンドロイドであつて人間ではない。なんだそう言えればいいんじゃないか。　　って違う。そんな話、信じてもらえるか。

くそう。馬鹿野郎！！畜生！！

駄目だフラれる！！今度こそ確実アウトだ！！

「へ、部屋散らかつてゐるから……」

畜生、そんな言い訳でどうするんだよ。

「何？エロ本片付けてないの？」

「ちげーよ！」

姉が余計な茶々を入れる。いつもなら鬱陶しいと思うところだが、今回は助かった。いや、違う助かつてない！どうする？どうすればいいどうするよ俺？

選択肢は？

一、エロ本片付けてねえんだ俺！

二、今日は帰ってくれ。エロゲーやらないといけないんだ

三、あれは女じゃない。女に見える精巧な人形だ

駄目だ。どれもエロ絡みじゃないか！くそう！

「ごめんなさい。そろそろ帰らないと、お父さんうるさいから」

申し訳なさそうに、けれども少し残念そうに、仁絵はそういった。助かった。ホント助かった。

僕はホツと一息。本当に、心のそこから胸を撫で下ろした気分だった。

「ただどやっぱ残念だ。今日こそはキス以上に持ち込めるチャンスだったかもしれないのに。」

「じゃ、送って行くよ」

「ねえ、秀ちゃん、進路変更したって本当？」

夜道を歩きながら仁絵はそんな事を効いた。

「え、そんなに会ってなかった？」

仁絵は黙った。そしてうつむいた。どことなく寂しそうだった。

最近、というか二学期になってから、会ってはいなかったのだから？ いや、会ってはいた。けれども、そういえばなんだかここ最近受験や勉強のことで忙しくて、というかそれしか頭になくて、そつえば勉強絡みの話しかしていなかった。こんな風に二人きりで、会話らしい会話するのは久しぶりかもしれない。

「コンピュータにも興味はあるんだ。けど、それって自分でやろうと思っても出来るじゃん。それより官僚になって僕はこの国を変えたい。その目的を果たすには法務省に入るのが一番だと思うんだ。それにはやっぱり法学部のほうが有利だし」

「そうなの？」

「うん、それに理系だと院まで行くじゃん。普通。時間かかるし、親にばかり負担かけていられないからな僕の場合」

「そう……」

仁絵は少し足を速める。僕から、少し離れる。そして振り向く。彼女の瞳が、街灯の光を吸い込んだその透き通る瞳が、僕を捉える。

「ねえ、秀ちゃん。秀ちゃんはどんな大人になりたいの？」

「え、官僚になるになるって……」

「うん。そうじゃなくて、どんな人になりたいのかわって」

唐突な質問だった。東大に入って、官僚になる。エリート、出世して経歴を積んで、それで政治家。そういうコースを漠然と描いていた。けれども、どんな人という単純で唐突なその質問には明確な解答が出なかった。

「僕は……」

「私はね、ただ自分の好きなことを精一杯やっていたい。他人の目なんか気にせず、誰にも邪魔されず、ただ好きな事をしていきたいの。それで、皆を幸せにできれば一番なんだけど」

「うん」

僕はそれだけしか言わなかった。僕は少し憂鬱になった。

正直、この時の仁絵の言った言葉の意味が、よく分からなかった。僕はなんとしてもエリートになりたかったのだ。幸せとか、好きなこととか、そういうのは二次でいい。とにかく、目標を定めそれをクリアする。そして力を手に入れる。それが僕の基本方程式だ。

それから、僕らは少し昔話をした。十三と三人で遊んだと、小学校の日々。

あの頃は、今と違った。明日のこと、将来のことなんか、考える事も必要なく、ただ今のことだけ考えて、遊んでいた。それでよかった。

だけど、僕らは大人になってゆく。明日、将来。それに向かって進む。それが僕らにかされた宿命なのだ。

だから僕は仁絵の言葉に腹を立てていたのかもしれない。彼女がそんな事を言ったのも女の子だからかもしれないが、ただ自分の好きなことをやる。それだったら子供じゃないか。僕らは大人にならなきゃいけない。大人になるってことは自分のことだけ考えていればいいってことじゃない。家族や社会、組織とのつながりを必然的に考えなくちゃならないのだ。そして、その中の価値が

自分の価値となる。社会にとって必要な人間こそ優秀であり、必要のない人間はレベルが低い。

官僚になるのは、社会にとって必要な選ばれた人間になる手段だ。僕は勝ちたい。もっと上に立ちたい。僕はそんなふうに思っていた。「ありがとう」

「うん、また連絡する」

僕は手を振って、彼女を送り出す。だが、仁絵は少し立ち止まって、そして指で唇をなぞった。僕はつばを飲み込む。

僕は彼女に駆け寄る。そして、少しきつく彼女の方を抱いた。ほのかに香る、リンスの香り、冷えた頬があたる。僕の鼓動は勢いを増す。

「また、行ってもいい？」

「あ、ああ……」

少し離れて、僕らは見つめ合う。潤んだ瞳で仁絵は何かを訴える。

「あんまり、無理しないで」

「えっ？……ああ」

「じゃあっ」

仁絵が手を振り、門の向こうへ消えてゆく。僕は彼女が、玄関の戸を開けるまで、ずっと背中を追っていた。

”あんまり、無理しないでね”

彼女の言葉が、なんとなく心に響いた。ヒビを打ったというのが正しいのかもしれない。僕の事を心配してくれている。とても優しい彼女。けど、すこし違うニュアンスを感じた。

「待ってる仁絵、僕は必ず、彼女にふさわしい男になってみせる！」

僕は、自分に言い聞かすよう、そうつぶやいた。

仁絵と別れた後、僕はスクールカバンを落とした場所へと足を運んだ。

カバンは無かった。警察に届けられているのだろうか。警察がむやみに封筒の中を調べなければいいが。

風呂から上がって、僕は部屋に足を踏み入れる。忘れていたわけではない。わざと意識に登らないようにしていたのだ。ある意味、現実逃避だったのかもしれない。

この異常な事態に対処しなければいけないというイレギュラーな現実からの。

少女は、ベッドに横たわったままだった。僕は部屋の明かりを付けなかった。

かわりに机の照明を付けておく。これだけでも部屋の中は十分明るい。

素足に何かが引つかかった。ジャケットだった。僕はそれを拾い上げる。ポケットになにか入っている。包丁に継ぐ新たな武器か、そうだったら隠して置かなければならない。違った。意外にも、僕の携帯電話だった。拾ってくれたのか。そうだとすると何故？親切のつもりだったのだろうか？殺そうとしていて親切はありえない。僕の弱みを握るためか。それとも証拠隠滅のためか。それはない。それならわざわざ家族のいるこのうちで殺人をやるうとはしないだろう。

——さてさて、どうしたものか——

考えてみれば、というか見ればわかるが、自分の部屋に得体のしれない女が眠っているのだ。アンドロイドらしいが。

しかし、そんな状態でよく平気で入られる。成り行きとはいえ、かなり異常な事態だ。

起こして、帰ってもらうのが妥当な選択だろう。

ベッドの側に、包丁が落ちていた。これは片付けておく。また襲

われたらひとたまりもないからな。

と、クローゼットの中の簡易金庫の中に放り込んでおいた。

まだ起きる様子はない。

死んだように眠る彼女にそつと顔を近づける。鼻のあたりに手をかざしてみるが、やはり呼吸がない。それに寝返りを打った形跡がまるで無いのだ。眠った時のまま、全く同じ位置にいる。僕は彼女の頬をつついた。冷たい。が、しかしやわらかい。人間の肌と言って差し支えないほどの弾力があり、柔らかさがあり、唯一違うのはその冷たさだけだ。部屋が寒いからという理由で説明をつけようと思えば出来なくもないが、なんとなく非人間的に思えた。

「オイ、お前！」

僕は彼女を揺さぶってみる。反応がない。

「おい！」

もつと激しく揺さぶった。布団がずり落ちて、肩が露出する。僕は視線をそらしながら布団をかけ直す。いや、その前に脈を図ろうと、腕を少し露見させて、脈を取った。

「……」

脈がない。

まさか死んでいるのでは？ いや、そんなはずもない。充電器らしい物体に目をやる。幅一センチ、長さ五センチほどの、小さな液晶にバーが走っている。半分位だった。

「本当にアンドロイドか？」

「とりあえず、武器は隠したし、この状況を誰かに説明するの骨折りだ。起きるまで待つとするか」

もしかしたらもう二度と起きないのではないか。そんな不安もよぎるが、僕は机に向かい勉強をすることにした。

——大学への数学——、大学受験での数学を取り扱う受験生御用達の雑誌だ。それにされたいいわゆる難問を解くのが、僕の日課だった。だからこれだけは欠かせない。

それから、四時間ほど、午前二時を過ぎても、彼女は一行に起

きる気配を見せなかった。

僕は、眠るに眠れず、ひたすら机に向かい勉強を続けた。

——ピポッ！——

午前三時過ぎだった。深夜、静まり返る部屋に、突然そんな音が鳴り響いた。僕は驚いた。

「CPU Mode High・MEMORY 1024KB + 40096KB OK——充電を完了致しました。これよりシステムを再起動いたします。オペレーションシステムをロード……」

目をつむったまま、ベッドに横たわったまま、少女、アンドロイドは不気味につぶやく。

五分ぐらい静寂が続く。僕は椅子に座ったまま、手を止めてずっと監視していた。

「オペレーションシステムロード完了。補助デバイス接続確認。異常なし。ヒューマンプロセッシングユニット起動。初期コンタクト、異常なし。物理的エラー、無し。パーソナルデータ異常なし。オリジナルグリーン。LS15-タミネ初号機、起動します」

少女がゆっくり瞼を開いた。光彩が真っ赤だった。その機械的な、不気味な瞳で僕を捉える。

「ターゲットを確認」

まさか！目からビームとか！

そんなものが飛び出してきても不思議ではない。それほど奇妙で機会で、非人間的な目をしている。少女はパチリ、パチリ、瞬きをする。二、三回してから。だろうか、光彩が緑、いや青に戻った。ガラス玉のよう、透き通った瞳だった。僕は、ぽかんと口を開いたまま動けないでいた。

今、確信した。この子は間違いなく人間ではない。

正真正銘の、アンドロイド。それで間違いない。

少女はゆっくり起き上がる。そして、ブラジャーの胸を頭にした

まま、こちらへ近づいてきて、頭を下げ、一言うつ。

「おはようございます。博士。ごきげんいかがでございますよう」

「あ、……ああ」

「それでは早速、死んでいただきますよう」

” それでは早速、死んでいただきますよう”

その言葉と同時に、少女は突進。両手を突き出し、僕に切りかかってくる。

「あっ」

目前でフリーズした。少女は、両手に持っているはずの包丁がなくなっている事に気づいたらしい。

「あれは僕が預かった。あんな物騒なものを振り回されてはかなわないからな」

「ですが、あれがないとミッションを忠実に実行できません。返していただけないでしょうか？」

「は？何言ってるんだお前！返せるわけねえだろあんなもの」

少女は沈黙。

僕も動けず固まっていた。

「かしこまりました。構いません。撲殺でもミッションを遂行することは可能です。肉体を強打することにより、内出血を促し、死に至らしめる。あるいは、頭部を強打することにより、脳震盪を起こし絶命させる方法によって、ミッションを完了させます」

言い終えると同時、少女は拳を振り上げる。僕は構える。しかし、避ける間もなく、少女の拳が僕の頬を打った。

僕は椅子ごとのけぞって、倒れる。床に肩を打って、椅子が倒れて、背中が窓に当たって窓ガラスを揺らし、大きな音を立てた。

ものすごく早かった。そして重い、痛い。とてもそんな華奢な腕で打ったものとは思えない。

倒れた格好のまま僕は見上げる。

だが少女は第二発目を放とうと、拳を一旦引っ込める。そしてす

ぐさま折り返し、勢いをつけて、飛んでくる。

「ままま、待った！待った！」

僕は情けない声で叫んだ。少女が、ピタリと止まる。

「何でしょうか」

「何でしょうかじゃねえ！」

痛みが骨にしみるとはまさにこのことだ。

僕は頬をさすりながら起き上がり、少女を警戒の眼差しで睨みつける。

「だから何で僕はそんなに死ななきゃならないんだ！」

とにかく会話だ。会話をしておけば設計上の問題なのか攻撃はできないのだ。

「あなたが死ななければならぬ理由については先ほど申し上げたとおりです」

「いや、だから……」

いや、待て、仮に本当にアンドロイドだとして、やはりここまで精巧なのは信じられない。頬をつついた時の感触といい、見た目といい、人間そのものだ。極めて精巧と言わざるを得ない。

そう僕は確かにこの子が人間ではない、アンドロイドだと確信はした。確信はしたが未だ受け入れられないのも事実。

それに、未来から来たというのは本当か。タイムマシンなんてものは本当に実現可能なのか。どうもその当たりがどうもうそ臭い。たしかに、こんな高性能なアンドロイドは現代のテクノロジーでは不可能だ。しかし、だからといって、タイムトラベルして未来からやって来たと考えるのは、それを肯定するのはあまりにも早計だ。「未来から来たっていうなら、それがほんとだとわかるものを示してもらわないとな。例えば未来のテクノロジーとか」

「かしこまりました。少々お待ち下さい……」

少女は薄明かりの中何かを探す。拾い上げたのはジャケットだ。そのポケットから何かを取り出した。

小さな白いスティックと直径8cmのシングル規格のCDを手渡した。

なんだこれは？

僕は不思議に思っ、しばらくそれを見つめていた。

「このパソコンに、USB端子は装備されていますか」

少女は学習機の隣に置かれた、白いデスクトップPC（FNV-DESKTOPERTVIEI）を指さして言った。

「去年買ったばかりの機種だ。当然内蔵されているが」

「キャップをとって、接続してください」

僕は言われたとおりにした。すると、確かにUSB端子があった。

僕はPCの電源を入れた。起動後OSは何かを認識したようだ。ドライバのインストールを要求している。CDを入れる。中身はインストールだ。起動して、セットアップを実行。完了後再起動をする。

この間また襲ってきたらどうしようと身構えていたが、少女は棒立ちしたまま微動だにしなかった。

何なんだこいつは……

「できたぞ。で、どうすりゃいい？」

「マイコンピュータを開いて、メモリ内にアクセスしてください」
記憶デバイスの類か？にしても小さすぎるぞ。本当に、何か入っているんだろうか？

まさかウイルスとではないだろうな。

しまった。迂闊にもこんなわけの分からないやつから受け取ったものをPCにつないでしまった。

恐る恐るマイコンピュータを開く。アイコンがひとつ増えている。リムーバブルディスクとなっている。やはり記憶デバイスらしい。

僕はそれをクリックする。そこで驚いた。

”4GB”

「なに？」

「どうかなさいましたか」

「なんだこの馬鹿でかい容量は」

「は？」

少女は首を傾げる。意味が分かっていないらしい。だが、パソコンにある程度詳しいものならこの数字の莫大さに驚きの声をあげるはずだ。

” 4 G B ”

僕のPCのハードディスク総容量が8・4GBだ。つまりその半分。このスティックはそれだけで、パソコン一台分の半分に相当する。そんな容量が、この小さなスティック一個に収まっている。こんな話聞いたこと無い。

「これは未来の製品なのか？」

「はい、でも少し前です。20012年ごろに電気街で買ったと言っていました。たしか980円」

「そんな馬鹿な。こんな大容量がたったの980円？」

「いえ、たったの4GBですから」

「待て待て。未来のハードディスクは一体いくらまで作られているんだ」

「1TBくらいは普通に出まわっています。500GB以下でしたら、ノート用でも3000円台以下で手に入ります」

「500GB!?!1TB!?!」

まるでSFの世界だ。国家プロジェクトのスーパーコンピュータでさえそんな容量あるかどうか怪しい。

少なくとも、この4GBだけは、イタズラやギャグで用意できるものではない。

こんな製品、当然巷では手にはいらない。何処か企業の試作品、あるいは軍事用の特殊仕様の製品ぐらいのことは考えられる。

ディスク内へアクセスする。ダブルクリックして、開くと、そこには四つのアイコンが並んであった。一つは画像、あと三つは動画ファイルだった。画像は2MB、容量は200MBこれまた馬鹿デ

カイ。動画にはそれぞれ番号が振られている。

僕はまず画像を開いた。

画面が切り替わる。表示されたのは

——ツインテールの黒髪をした、見た目、十代中盤くらいの女の子の裸——上半身が、胸が、思いつきり露出していて、下は白い下着を着ているが大きく股を開いている、いけない画像。要するにエロ画像だった。

「はいッ？」

——コン、コン——

ドアをノックする音が。

「秀真？何？今の音」

母さんの呼ぶ声。さっきふっ飛ばされた時の音で起こしてしまったらしい。

ヤバイ！

ドアの位置からだど、ちょうど視覚になってアンドロイドの姿が見えない。それはそれで都合だが、要するに、ドアを開けて僕を見れば確実にCRTディスプレイに写ったエロ画像を見ているという構図になるのだ。僕は慌てて、ディスプレイのスイッチを切った。

「さ、参考書落としたんだ」

「勉強頑張るのはいいけど、もう遅いんだから早く寝なさい」

「あ、ああ……わかった」

母さんは部屋に入って来なかった。僕は、念のため鍵を部屋の鍵をかけてから、そしてディスプレイの前に戻る。

もう一度スイッチを入れる。エロ画像が表示されるモニター。視線をそらそうと、僕の理性は訴えかける。何のいたずらなのだ。全く。

「この画像は一体何だ」

「それはあなたの趣味です」
「は？」

意味のわからないことを言う。イタズラのつもりか。男にエロ画

像を見せて喜ぶ変態なのか？と一瞬思ったが、そこは突っ込まずにおいた。いや、こいつアンドロイドだし。

気を取り直して、01と書かれたファイルをクリックする。カーソルが砂時計マークに変わる。なかなかファイルが開かない。無理もない。こんなにデカイ動画ファイルは普通ないのだ。

一分ぐらいして、動画はようやく始まった。

まさかエロ動画じゃないだろうな。僕はあらぬ期待を一瞬したが、そうではなかった。

「よくぞたどりついた。ここまでよく生き延びたものだ。褒めてやろう一条秀真」

何？何だコイツ！

写っていたのは、コンクリートの壁を背にして、顎から下だけを写した、白衣の男。無精髭が生えていて、ヨレヨレのシャツを着ている。

「なぜ僕の名前を知っている！」

僕は思わず画面に向かって叫んだ。

「ああ、なぜ俺様がお前の名前を知っているかって？まあそうだな。最初にネタバレをしてはつまらない。だからこれだけ言っておいてやる。俺は今のお前が大嫌いだな」

「おい、なんだコイツ！」

僕は隣でつつ立つて居るアンドロイドに訊いた。けれども彼女は何も答えない。

「はじめに断っておくが、タミネには予めこの動画の再生中は何も答えるな、何もするなと指示を出している。したがって、彼女への質問は無意味だからそこんところよろしく」

僕はぎょつとした。

会話しているわけではない。マイクを接続していないのだ。僕の声が聞こえるはずない。そう、この動画は僕の思考を先読みして、

作られているのだ。

何だ？

僕の額に嫌な汗がにじむ。なにかとてつもない陰謀の匂いがする。「この俺様は、タミネの開発者だ。けっして怪しいものではない。だから心して話を聞くように」

映像の男が立ち上がる。腰に手を当て、壁に向かってなにか、思わせぶりの態度をとる。

思い切り怪しい。

「まず、第一にミSSIONの目的を伝える。ああ、これも釘を刺すようで悪いが、まあ、お前がここまで辿りつけない場合は聴かせる必要もなかったのだが、どうやら歴史の修正力——タイムパラドックス回避の力は——そうやすやすと目的を果たせてはくれないらしい。なので仕方がない。この偉大なる俺様が貴様に語って聞かせてやろうではないか。感謝するが良い」

——次のファイルを再生しろ——

そんな表示が出て動画は終了する。

なんだこの尊大で鼻につく話し方は。一体何処の誰なのだ。まあ、こんなおかしい動画を作るやつだ。どうせロクでもないやつなのだろう。

僕は続きの動画をダブルクリックした。数秒待たされて、また再生される。

また椅子に座っていた。足を組んでいる。

「俺は今2014年の世界にいる。お前の居る1999年から数えて15年後だ。そして、この、2014年の世界に、かつて当たり前のように送っていた日常は存在しない。朝起きて、太陽の光を浴び、街へ、学校へ、友と会話を交わす、家に帰り、家族と団欒。なんて平和な日常はもはや何処にもないのだ。——太陽の光を浴びたのはもういつのことだっただろうか。誰かと話したのはもうずいぶん前の事になる——。そんな、最悪な毎日を変えるため、俺は日夜、

俺は、寝食を忘れ、机に向かい、基板を組み立て、プログラムのコードを組んだ。そうして、五年、気がつけば三十を過ぎ、とうにおっさんになっていた。そんな長い月日を費やして、ついにタイムマシーンを完成させた――」

なんだその話は。これではまるで、SF映画ではないか。

嘘だろう。未来が、そんなふうになっているなんて。ありえない。僕はどうなっている。仁絵は？十三は？母さん、父さん、妹、姉さん、皆どうなっている？

「――タミネは助手のロボットとして開発をした。かなり苦労して、タイムマシーンの開発にも遅れが生じたが、結果的には良かった。俺が作ったタイムマシーンには生身の人体は耐え切れないものだったからな。おかげで、過去にタミネを送ることができ、そして目的を達成させることが可能となった」

男はまた立ち上がって、腕を組んだ。カメラの橋から橋へ歩きながら男は続ける。

「信じられないって？まあ4GBのUSBメモリだけじゃ未来からやってきたという証拠としては不十分かもしれないな。本当ならもっと凄い未来のテクノロジーを、例えばああそうだな。スマートフォンとか、SSDとかを持って行かせたかったんだが、あまりに技術の差異があるものはタイムパラドックスを生むおそれがあったな。その程度のテクノロジーが言動だった。まあ無理に信じるとは言わん。別に信じなかった所でタミネに与えたミSSIONに支障があるわけではないしな」

また動画が切れた。僕は次の動画を再生する。

「一条秀真！」

男は振り向き、そして力強く言った。

「いい加減目を覚ませ！お前のやっていることは全部間違っている！」

机をバンと、力強く叩いて言った。

「お前の考え、お前の行動。そのすべてが、関わる皆を不幸にし、

破滅を生むのだ。全部お前のせいだ！お前が、愚かだから、お前が、何も考えないからこんなことになったのだ！お前が、お前の存在こそが害悪だ！この悲劇、この混沌、この絶望！すべてお前が招いた最悪だ！だから貴様には責任をとってもらう！お前は、死を以ってその罪に贖うべきだ。今すぐ、タミネに殺される。もはやお前に拒否権など無い。いいか、これは運命だ。決して逃れられない。逃れることなど許されない」

男は涙を流す。怒りを震わせて言う。涙を隠すよう、また背を向けた。

「悪く思つな。これもすべて愛する皆のためなのだ。そしてなにより、お前自身のためなの。だから今すぐ死んでくれ。自分の運命を受け入れてくれ」

動画はそこで終わつた。僕は頭が真っ白になった。

そんな馬鹿な！僕はクローゼットに飛び込んだ。そしてノートパソコンを引っ張り出し、絡んだコードを解く間もなくコンセントを入れ、電源スイッチを押す。

この動画の言わんとすること、そしてこのアンドロイド。僕はすべてを理解した。そうだ。これ意外考えれない。

起動ディスクをスロットに挿入し、コマンドプロントを立ち上げる。黒い画面にカーソルが表示される。ロードに少し時間がかかる。僕は苛つ。焦る。そしてコマンドが入力可能になったところで、タイプする”Format C:¥”ハードディスクのデータをすべて消去した。

他にもたくさん、大切なデータはあった。が、構わない。そんなことを言っている場合ではないのだ。

黒い画面に表示される。バー。刻一刻と進んでゆく。これでもう、悲劇は怒らないはずだ。まさか、あんなお遊びで作ったプログラムが、そんな悲劇を生むなんて。僕はあまりにも浅はかだった。愚かだった。

そんなもので友を、家族を、仁絵を失う。冗談じゃない。僕はそんな事望んでいないのだ。

これでいいんだ。これでいい。十三にはあとできちんと事情を説明すればいい。あいつのPCからもデータを消さないと行けない。こんな危ないもの持つては彼で命を狙われるハメになる。

「こ……、これで大丈夫だ」

僕は額の汗を拭った。

「何が大丈夫なんですか？」

アンドロイド少女は言う。

そうだ。まだ駄目だ。こいつが存在している事、それ自体危険なのではないか。どうする。壊すか。でもどうやって。

物理的に破壊するのは難しい。こいつの機動性能を考えればどう考えても僕一人で対象できかない。

「——はい。かしこまりました」

アンドロイドは返答した。僕は何も行っていない。そして窓辺へ向かう

おい、まさか……

飛び降りるつもりなのだろうか。こいつは、自分の存在を消し去るために。自らの破壊を……

罪悪感に狩られる。あの男が作ったとはいえ、人の形をした、少女のアンドロイド。それに対し、僕は死という残酷な選択を自ら実行しなければ鳴らない状況を与えたのだ。全部、僕のせいだ。僕が悪いんだ。何も考えず、こんな玩具を作ってしまったがために。

アンドロイドは振り向く。ゆっくり瞳を閉じてゆく。

「待て！お前は！」

僕が何とかする。なんて言えるか。僕が招いたことなのだ。そんな虫のいいはなしあるものか。けど、彼女には何の罪もない。全部僕が悪いんだ。

くそう！

少女は静かに口を開いた。

『やれやれ、とんだ勘違いだ、いくら学歴バカのナルシストだと言え、本当に痛いやつだ。まさかそんな思考をするとはな。こりゃちよつと、さすがの俺も予想外だ』

はっ？

声は同じだった。だが、口調が今までと違う。まるで別人のようだ。

『つたく、あんな子供の遊びでどうこうなるわけ無いだろう。あんなものは全く関係ない。それに、そんな雑な方法で消去しても、消えたことにはならんぞ。復元ソフトを使えば一発だろうが』

「それじゃあ……」

『ああ、その人工知能プログラム——というかただ擬似的に会話するプログラムだが——そんなおあそびなんか全く関係ない。事態はそんなに単純なものではない。もっと複雑で、厄介だ』

僕は絶句した。データ消去作業を実行中のノートPCの画面を一瞥する。

だったら一体、なぜ命を狙われる羽目になったのだ。この時代の僕が関係しているんだろう少なとも……

『こいつに代返してもらうのもめんどろ。いちいちテキストデータ化しないといけないんでな。仕方がない。お前と直接話をしてやる。タミネの指示に従い電話の準備をしろ』

口調からして、おそらく動画の男なのだろう。どうやら、タミネを介して語りかけているらしい。本当に、ありえない光景だと思った。

少女は目をあける。こちらへ近づいて、そして告げた。

「インターネット環境は整っておりますか」

「ああ」

「それではまず、パソコンを起動して、インターネットに接続してください」

僕は言われたとおり、パソコンを起動して、インターネットに接続をした。

ダイヤラが起動する。"接続"をクリック。ダイヤル音の後、ピーギヤラギヤラと、電子音が鳴り響き、プロバイダのサーバーで、IDとPassの認証がされと、インターネット経の接続を示すアイコンが表紙された。一分ぐらいかかった。

"ftp://project.tamine.chan/tamudennwa.zip"

少女が、ブラウザのアドレスバーに入力した。そして何かをダウンロードし始めた。

「残り」二時間三十四分」！って、何だこのでかいファイルは！

「たかだか、48MBではないか、なぜそんなに時間がかかる？」

「そんなデカイファイル、普通インターネットに転がさないだろ！」
「何を言っている。ああそうか、まだブロードバンドが普及していない時代だった。畜生せめてADSLならまだよかったが、アナログか。前時代的だな。仕方がない、少し待ってやる。っとく寝ようと思ったのに。後のことはタミネに聞け」

僕は歯噛みした。こんなに長時間、ダイヤルしていればプロバイダー使用料も電話代もバカにならない。今月の請求が来たら確実に問い詰められる。一体何をしていたのだと。きつとエロサイトを徘徊していたんだな。なんて姉に変に勘ぐられるだろう。くそう。

ダウンロード完了を待つ。アンドロイドは僕から話題を振らない限り一言も話さない。実にアンドロイドらしい。

僕はダウンロードを待ちながら、まじまじと少女の体を視線で舐め回した。冷たい床を踏んだ、小さな足、柔らかくなめらかな曲線を描くふくらはぎ、太もも――彼女の足。銀色のプリーツスカートで包まれたカーブ、腰のクビレ、そしてシルバーメタリックのブラ。僕はゴクリつばを飲み込む。普通の女の子相手には到底できない芸当だ。

少女、いやアンドロイドはそんな僕の視線に大して何も咎めない。

何の反応も示さない。一ミリも動かない。本当に、人形のようなだ。

ダウンロードが完了した。

午前五時五十分。まだ外は暗い。が、急がないと皆起きてしまう。ZIPファイルを解凍し、中のファイルを取り出す。EXEファイル。すなわちプログラムソフトウェアだった。僕はそれをクリックして実行。インストーラだった。

パソコンにソフトウェアがインストールされた。

プログラムを立ち上げる。電話をするアプリケーションのようだ。僕はマイクをセットした。

電話帳というタブに何か表示されていた。クリックすると一件登録があった。タミネに促され、僕はそれをクリックする。

『はーあ。やつとか。まったく遅せえなあ。いい加減眠いぞ早く要件を言え』

生ぬるいあくびを交えて男は答えた。画面には――Sound Only――と表示されていた。

「に、2014年なのか？そっちは」

『ああ』

「本当に？そんな事出来るのか。信じられない！」

『2011年にニュートリの存在が証明されている。まあタイムトラベルはその応用だ。詳しい仕組みは知らんがな。もっとも、身の人間をタイムトラベルすることはできない。音声データぐらいは余裕だ。そっちのスペックがもう少しならテレビ電話も可能だが、それで何のようだ？』

ニュートリノだって？光よりも速くすすむとされるあれか。

そんなものが発見された。それはとんでもないことだ。従来の物理法則を根底から覆すものなのだから。それこそ異次元世界の存在すら肯定しかねないほどの。

「呼び出したのはお前だろ！」

『お前とは無礼な。歳上に向かってそのような口の聞き方をして良いか？』

「はっ。さっきまでのあんた、そしてタミネだっけ、このアンドロイドの言動から察するに大体の検討は付いている。第一あのプログラムの存在を知っているんだ。僕を殺そうとする理由も、僕の個人的な秘密を知っていることを考えても、あんたが限りなく僕に近い

人間であることは明らかだ。そしてなにより、タイムトラベルとアンドロイドの開発。こんな芸当ができるのは、そんな天才は——考えるに一人しか居ない。そうたる十三健介！そこにいるのは十五年後のお前、十三健介だ！違うか！」

僕は自信たつぷりに言った。画面を指さし、まるで探偵ドラマの推理シーンのように、少し気取って、格好をつけて、言い放った。
『クッククツ！ハハハハツハ！』

電話の向う、男は笑う。

『——十三健介。懐かしい名前だ。ああ、そんな奴もいたな。すっかり忘れてたよ』
「なに？」

『残念だが、ハズレだ一条秀真。俺は十三健介ではない。まあ、あいつが秀才であるというは認めてやるが、しかし天才ではない。この俺には遠く及ばないだろう』

誰だ。一体誰なんだお前は。十三じゃないとして、こんなことができる人間……駄目だ全く思いつかない。

『まだわからないのかバカ。本当にばかだな。やっぱりお前は馬鹿だ』

「馬鹿って何回言うんだ！この僕は名門私立清王学院高等部特進クラスで常にトップをとっている優等生だぞ！東大合格も現段階で確定だ。そんな僕を馬鹿呼ばわりするなんて許さなぞ！バカって行つた奴が一番バカだからな！」

『何を言っている馬鹿者。そうだよ。一番馬鹿なのは、お前。いや俺自身だ。そんな事はとつくの昔にわかつている』

「は？」

『よく聞け愚か者。俺の名は一条秀真。俺はお前だ。他の誰でもない、お前自身だ』

そんな馬鹿な！そんなはずはない。いくら何でもありえない。そんなことあるはずがない。

僕は心のそこから動揺した。

確かに、こいつがアンドロイドだと悟った時、ひょっとして自分が作ったんじゃないかと一瞬思った。しかし、それはありえないはずだ。瞬時に考えを改めた。

だっておかしいじゃないか。それなら、どうしてこのアンドロイドは僕を殺そうとするんだ。お前が送り込んだんだろ？ だったら、なぜ自分で自分を殺そうとする？ そんな馬鹿はいるものか？

僕は問う。

「冗談にしては立ちが悪いぞ。タミネを作ったのはお前なんだろ？ だったらなぜ僕を殺そうとする？」

『ああそれが。そんなの簡単だ。俺が死にたくなっただからだよ』

「はい？ 今なんて？」

『耳の遠いやつだな。じいさんか？ もう一度言う。これで最後だぞ。俺は死にたくなっただ。だから自分を殺すために過去に、アンドロイドを送った。以上』

「ちよつと待て？ 意味が分からないぞ。死にたくなっただって？？」

『——いざ自殺しようとするのと怖くてな。痛いのか嫌だし、失敗したらどうしよとか思っているとなかなか実行に移せなくてな。うん、これはどうしたものか。困ったなあと思っていたら、ひらめいたんだよ。そうだ。アンドロイド作ってそれを過去に送って殺させようって。うん、我ながらなかなかの名案だったな。ハハハッ』

僕は返答に困った。男はまだ続ける。

『それともう一つ、俺はリア充が大嫌いだ。お前みたいなリア充は爆発しろ』

「意味がわからねえ！（リア充ってなんだよ）」

『最初はな、人生をやり直そうと思って、タイムマシンの開発を研究していたんだ。けど。まあタイムパドックスなんたらで歴史を変えるのは相当難しって事がわかって諦めた。そこで、暇つぶしにタミネを作ったんだが、まあ早い話、面倒になっただ、さっさと自分を殺してしまおうと思ったわけなんだ。それでタミネをそっちへ送り込んだ』

僕は椅子から立ち上がって、額に手を当て考える。そしてタミネを見つめる。おかしい。やっぱりおかしい。というか、納得が行かない。腑に落ちない。

僕は立ったままマイクを手に取り、言い放つ。

「もう一度確認する。このアンドロイドが僕を襲う理由は、——僕の作った人工知能が、未来で機械VS人間の戦いを生む原因となり、そして、お前は人間側のレジスタンスで、僕を殺す事により歴史を変え、人工知能が誕生しなかった未来を作ろうとした——。というものではないのか？」

『なんだそれ？お前は中二病か？別に中二が悪いとは言わんが、その誇大妄想を他人に話すのはやめたほうがいいぞ。痛いやつだと思われるからな』

「なんだよその厨二病って？」

『……』

しばし沈黙。男は何も答えない。僕は苛立った。

『仕方がない、もう一度言ってやる。お前の人工知能プログラムも時はこの件には全く無関係だ。それにこっちの世界はSF映画みたいに破滅しているわけじゃないぞ。今も昔と変わらず人々は平穏無事に暮らしている』

「というと……つまり」

『だから言っただろ。俺は死にたくなっただからタミネを過去に送った。この件はそれだけ。それ以上のなにもない。以上』

僕の全身に怒りがこみ上げる。僕はマイクを思いっきり握った。

「やっぱりお前は俺じゃねえ！絶対に！！」

「まだ信じないか」

「当たり前だ！お前が僕であるはずがない！そんなの絶対おかしい！なぜなら、僕が自殺をしよう思うはずがないからだ。今から十五年後、三十二歳の僕、その頃の僕は仕事をバリバリこなし、順調に出世して、都内の高級住宅街に家を構え、奥さんと……ひ、仁絵と、その子供と楽しく暮らしているんだ。充実の真っ只中にいる！そん

な僕が死にたいなんて思うはずないだろう」

「やれやれ……、ったくお前は本当に愉快なやつだ。その妄想は何処から出るのやら。まあこの際だから言っちゃろう。百里坂仁絵とお前は結ばれない。決してな」

「なに？」

「あと、それから十五年後の俺は無職だぞ。早い話、ニートだ。仕事なんてしていない。だからこうしてお前と遊んでいられるんだ」

「そんな訳ない！ありえない。この一条秀真が無職だ？バカも休み休み言え」

「そんなテンプレ表現をリアルに使う奴が居るとはな……ハハハ」

と、電話の向こうの男は愉快に笑う。僕は苛つ。そうだ。こんな奴ぜったい僕であるものか。自殺したい？意味が分からない。自殺なんて、弱い奴の逃げじゃないか。僕はそんな卑怯者なんかじゃない。

「あの……。蛇足かと思いますが、わざわざ自殺するためにタイムマシンで私を過去に送ったことについては一切触れなくてよろしいのでしょうか」

「ああそんなことはどうでもいい」

電話と僕は同時に、異口同音に言った。

タミネは少し肩を落として、悩ましげに両手の指をツンツンとつついた。なんだその仕草は。

「とにかく、僕は認めない。お前が僕だなんて絶対にありえないからな」

「仕方がないな。なら、証拠を出してやる」

そう言って、電話の男は少し沈黙する。

僕は思う。証拠？？あるはずがない。写真とかそういうたぐいのものなら盗もうと思えば盗めなくはない。そんなものは証拠にはならない。

僕の過去を知っている？それも証拠にはなりえないぞ。タイムマシンが作れるんだ。それなら過去を調べるくらい造作も無いはず

だ。

「今から言うことをよく聞け」

「なんだよ？」

「あのブルマ衝撃が忘れられない」

何？

僕の頭脳に衝撃が走る。フラッシュカットの如くよみがえるあのシーン。

そう、あれは小学六年生の時だ。

小学六年生といえば、小学校最高学年。すなわち、小学校最後の年だ。そしてその運動会の種目は、全国どの学校もほぼ例外なく、”組体操”である。

組体操は、高度なテクニクと緻密な連携プレイが要求される、極めて難易度の高い集団競技だ。当然、運動会直前にはしきりに練習が執り行われる。

——それは雨の日だった

雨の日は運動場が使えない。僕らは狭い体育館で、組体操を練習する。そしてその時、事件は起きた。

普段の練習では遠すぎてよく見えない、女子のチームが、体育館のスペースの関係上、間近にいた。

僕はその時体調が悪く、見学していた。

すると、目の前で、女子が『飛行機』——それは、三人一組。うつぶせ寝状態の一人を下の二人が、それぞれ、足と手を持ち上げるようにしてまるで中を飛んでいるかのようなポーズをするという演技——の練習を始めたのだが、バランスを崩して、後ろの、つまり足を支える方の生徒が崩れかけたため、上に乗っている女の子が、大きく股を開いて、すなわち、ブルマの三角形を、股を大きくさらけ出す、なんとも言えない破廉恥な格好になってしまったのだった。

ぼくはその時、斜め前に座っていた。そして、その光景を目の当たりにしてしまったのだ。

以来、僕はそのブルマの衝撃を忘れられない。

それがキツカケとなつて、僕はブルマ女子に対する異常なまでの執着心を覚えてしまった程なのだ。

そのことを知っているのは、むろん、僕だけだ。

あの時、あの場所で、あのシーンを目の当たりにしたのは僕だけだったはず。

ということは、まさか、まさかの、本当に……

「今お前、あのシーンを思い出していただろう。実を言うところの俺もそうだったんだ」

くそう！ 凶星か！！

駄目だ。やっぱりコイツは僕だ。僕以外ありえない。くそう。こんな事で自分の存在証明をしてしまうなんて。なんてことなんだ。

一生の不覚！！

「一生の不覚とか思ったな。だが案ずるな。もうすぐ楽になる」

「ならねえよ！」

「ああそうそう。いいことを。いや悪いことを教えてやる。誠に残念なことに、2000年代前半にはブルマは学生生活の場からは消滅しているぞ。ブルマは恥ずかしいとか、女子の権利とかわけのわからないフェミニズムのせいで、ブルマはこの世から葬り去られるのだよ」

「なんだと？」

「それどころか、00年後半にはスク水も、スパッツ化し、スカートもズボンを履いてもよしとかいうことになっている。まったく恐ろしい限りだ」

そんな馬鹿な！！

僕は頭をかきむしった。それじゃ青春のロマンは一体どうすれば

いいというのだ。

ブルマ、スク水、そしてスカート。それは男の、男子のロマンじゃないか。二度とやっては来ない青春の、貴重な時間の、壮大なロマン。それがなくなる？どうなってんだ00年代！！

「ノストラダムスの大予言はある意味的中した。90年代を以って、俺達のロマンは、ブルマは、フェミニズム（恐怖の大王）の出現によつて滅ぼされるのだよ。どうだ。死にたくなつただろう？おちおち仕事なんてしてられないだろう？俺がこうして五年もの間。太陽の光も浴びず、家族とも離れ、ずっと、作業場に籠りタイムマシンやらアンドロイドの研究に勤しんだ訳、分かるだろう？」

「ぐぬぬぬうー！！」

唸り声をあげて僕は抗議を示す。未来の僕は続ける。

「これで分かつただろう。お前は俺だ。俺はお前。そして俺は死ぬしか無い。だからおとなしくタミネに殺されてくれ」

「つて、んなわけねえだろボケ！」

「なに？今ので真意が伝わらなかったのか？」

「伝わるか！！確かに、ブルマの体操着がこの世から消えるというのは……それが本当だとしたらかなり恐ろしいところだ。本当に、フェミニズム（恐怖の大王）の出現したとっていいだろう。だけど、それとこれは別だ。お前が、僕だってことは認めてやる！が、なんでそうなった！なんで、僕は官僚になつていない！」

「なつたさ。でもやめた」

「なに？なんだと？」

「東大に合格して、官僚になつて、順調に出世して……。端から見れば順風満帆だったさ。俺の二十代は。けれども、あとには何も残らなかった。実績なんてなんてものは所詮、組織の一員としてのものでしかない。俺のものではないんだよ。そして俺はあるとき気づいたんだ。ああ、俺って何のために生きているんだろうつて。そしてたら急に虚しくなつたよ。別にこの仕事俺じゃなくてもいいんじゃない？俺以外の人間がやつたつて、多分同じだ。って思ったときな」

「何を言ってるんだお前は！」

「ふん。何が官僚だ。エリートだ。つまらなん。そんなものになつてなんになるんだ。くだらない。結局、俺たちは社会が作ったシステムに乗っかって、誰かが敷いたレールに乗っかって、そのとおりに動かされているだけだ。要は歯車さ。壊れたらいくらでも取り替えのきく部品でしか無い。そうさ。別に俺じゃなくてもいいんだ。他の誰かがやったって、同じ事なんだよ。——そのことに気づいたら、働くのが嫌になった。ていうか生きているのがだな。お陰で五年間ずっと、家にこもりっぱなしだ。家族は呆れて顔も見なくなつたよ。うざいリア充たちともお別れできたし、付き合ってた女も何処かは行ってしまった。まあ別に好きじゃなかったからどうでもいいが。今や、好きな時間に起きて、寝れる最高の暮らしだ。働いたら負け、っていうのは本当だな。まあそのおかげで、すっかり昼夜逆転して太陽の光をしばらく見ていないがな。ハハハ」

僕はその間、何も反論できないでいた。未来の僕は言うだけ言つて、もう寝ると宣言した後、一方的に電話を切った。

——啞然とした。

それは未来の世界にブルマの体操着がなくなっているというからではない。いや、少しはあるが、それ以上、僕は未来の自分に対してこの上ない拒絶を抱いた。

生きるのが馬鹿馬鹿しい？

未来僕はそんなことを言い放った。何を考えている？僕には全くわからない。

誰かが敷いたレール？歯車？

先人の作った優れたシステムに乗っかって、効率良く生きる。それの何処が悪い？

僕は納得出来なかった。官僚になつていない自分。仁絵と結婚していないという未来。そしてなにより、自ら死を望んでいる自分。到底受け入れがたかった。

僕は、PCラックを叩きつけた。ネット接続がタイムアウトする。

タミネがゆっくり瞬きする。ゆっくり近づいてきて、そしていう。「——というわけです。ですのでどうか、死んでください」

僕はタミネを一瞥する。タミネは両手に包丁を持っていた。ぎよつとする。

金庫野中に入れておいたはずなのに……。番号式。どうやって開けた。そうか。相手が僕なんだ。どういう番号を入れたかはすぐに分かる。くそう。やられた。

僕は一步後に下がった。タミネは一步踏み出す。包丁を、差し出して僕に襲いかかるうとする。

「冗談じゃねえ！そんなくだらない理由で死ぬるか！せめて命を狙うなら人類の危機を救うべく立ち上がった、英雄とかそういうのにしろよ！」

馬鹿野郎！

なのに、現実とは違う。ただ生きるのが嫌になった。痛いのが嫌だから過去の自分を殺す。そんな訳のわからない理由で殺されてたまるか！

僕はもう一度未来の未来の自分を呼びだそうとした。だが駄目だ。ダイヤルから接続まで一分はかかる。そんなに待てない！

タミネが斬りかかる。僕は左に避けた。パジャマの腕が切り裂かれる。ターンする僕の背中を、包丁がまたかすった。上半身が裸になる。ベランダへ逃げる僕を追うタミネ。ズボンが切られた。

僕はベランダに飛び出し、窓を閉めた。外から鍵はかけられない。開けられないように、力いっぱい押さえる。しかし、アンドロイドにはかなわなかった。十秒と持たぬ間に、タミネは窓を開け放った。ベランダの幅は一メートルもない。

「さあ、天国へ行きましょう」

「バカ止める！」

タミネがベランダの窓を閉める。これで退路は消えた。くそう。

飛び降りるか。いや、ここは四階だ。下は駐車場。運良く車の屋根に落ちれば命だけは助かるかもしれない。

駄目だ。こいつはこの高さまで飛んできたんだ。ここから飛び降りるくらい造作もなはずだ。

「動かないでください。狙いを外すと余計苦しむことになりますから」

「待て！待てって！」

タミネは腕を引く。助走をつけて、包丁が、刻一刻と僕の胸に向かって突き進んでくる。僕は、逃げられない。パンツ一丁になって、ベランダのフェンスを背に、ただ恐怖するしかなかった。

もうダメだ。死ぬ。くそう。こんな。こんな結末なんて……
これが、僕の最後。

畜生！これから東大に合格して、司法試験に受かって、国家公務員一種に合格して、法務省に入って、エリート官僚として、出世街道を歩み、そして仁絵と結婚して、彼女を最高に幸せにする。最高の人生が待っているというのに……

クソウ。本当にクソツタレ！

視界が揺らぐ。タミネの包丁が、もう、あとホンの数センチと迫っていた。

僕は目を閉じる。僕の瞳からじわり涙が溢れ出した。

カンッ！

金属を打つ音になった。ハッとして、僕は目を開ける。包丁は僕の胸に刺さっていなかった。外してる??

ベランダのフェンスぶち当たって、金属音を立てているのだ。どういうことだ？

「……」

タミネがうつむいている。そして倒れかかってきた。

「ダメ……」

タミネが、静かにつぶやいた。

えっ？

どういうことだ？何が起こった？？

「ダメ！やっぱりダメ！あなたを殺すことなんて！私やっぱりできない！できないよ！どうして？どうしてなの？お願い！！死なないで！！」

甲高い声だった。悲鳴のようだった。さっきまでの冷徹な機械音とは違う。まるで、人間のようだ。

そしてなにより、顔を上げたタミネは、目から溢れんばかりの涙を流していた。泣きじゃくって、潤んだ瞳で僕に必死に訴えかけていた。

「えっ??」

僕は思考停止。固まって動けない。

タミネも沈黙する。包丁を握ったまま動かない。

ほんの数秒の出来事だった。ほんの数秒、まるで世界が止まったように僕とタミネは固まって動かなかった。

「ご、ごめん……。いえ、申し訳ございません。今のは誤作動です。もう一度、直ちにミッションを実行……」

声のトーンが下がる。さっきまでのクールな機械的な声に戻った。包丁を引っ込めるタミネ。そしてまたつきだそうとしたが、手が震えている。

——そんなふうに見えた。

僕は彼女の手を強く握った。

「あつ」

包丁が落ちた。タミネは包丁を拾おうとする。

「止める！」

「無理です。プログラムが！体が勝手に！！」

タミネが拳を差し出し、僕の胴体を打った。

とても強い一撃だった。だが僕は耐えた。フラつきながらも倒れないように必死にこらえた。

その隙にタミネはまたしゃがむ。

「……止めろと言ってる！お前を作ったのは僕なんだろ！だったら僕の命令を聞け！！」

タミネは包丁を拾わず立ち上がる。そしてその青い虹彩で僕を見つめる。

「——かしこまりました。ミッションコードN - 0000021221を変更いたします。Passの入力を」「なに？」

「このミッションにはパスワードが設定されています」

「何処に入力すればいい。どうやればいいんだ？」

「入力デバイスはワイヤレスキーボードをご使用いただければ大丈夫です。——現在二十二秒経過したところです。残り四分三十八秒以内にただししいパスが入力されない場合は、ミッションを再開再開いたします。その際パスコード入力は二度できなくなり、このミ

ツシヨンの変更は永遠に不可能となります」

「ワイヤレスキーボード？なんだそれ？」

「ええと……無線式のキーボードですが。Bluetoothの」
クソウ！おそらく未来のテクノロジーだ。そんなものこの時代にな
ない！

僕はタミネを払いのけ、部屋へ飛び込んだ。慌ててネット接続を
開始。ダイヤラを起動。

僕はブリーフパンツ一丁のまま、画面に表示されるダイヤラが接
続を完了させるのを待った。

接続を完了して。さっきの電話アプリを起動する。コールが鳴る。
しかし何度なつてもでない。

寝ているのか！くそつたれ！

午前六時五十四分。

一分進んだところだ。あと残り三分半と少し、といったところか。

「畜生！どうすりやいい！！」

タミネはベランダに居たままだ。僕は頭をかきむしる。

僕は意味もなく部屋中を歩きまわった。動物園の猿の如く歩きま
わった。——パンツ一丁で。落ちて着け！

考える！考えるんだ。いいか、あれがどんなに精巧な作り、高性
能なアンドロイドであっても、所詮人間の作り物なんだ。そうだ。
だとすれば、必ず何処かに解は存在する。

そうだ。第一、作ったのは僕じゃないか。確かにこれは難問だ。
しかも僕の命がかかっている。命がけの難問だ。

けど、出題者は自分自身なんだ。だから必ず解はある。そして解
ける。解けないはずがない。

「そうだアクセス！ハッキング！」

僕はベランダの窓を開け放つそして呆然と立ち尽くすタミネに問
いたです！

「おい、お前と接続するにはどうすればいい。どうやったらお前に

つなげるんだ。教えてくれ」「現在セキュリティが掛けられておりますが、それらを解除していただければ接続可能です」

「さて、そんな時間はない。一気に無効化する方法はないのか！」

「ファイヤーウォールを無効化し、ポートを開放すれば簡単に接続できますが……」

「——わかった。どうすればいい！」

「ええと……」

タミネは唇を噛んだ。そしてなぜかモジモジ、まるで女の子みたい……。

「や、やさしくしてくれなきゃ、嫌だよ」

「はあ？」

と、タミネは僕の手を取った。そして、その手を、銀色のブラジヤーの上から、胸に当てる——ふにゅッ！

やわらかい感触が僕の手に伝わる。生暖かい人肌が、僕の理性を奪ってゆく。

「ななな、何やっているんですか……」

「残り、二分二十五秒です」

クソウ。これも妨害工作か。おのれ未来の一条秀真！なんてやつだ！健全な高校男子を色香で惑わすとは！恐ろしい手を使いやがって……！

「ポートを開放したい！どうすればいいんだ！」

「……それは……」

「早くしろ！」

「わ、分かりました！」

と、タミネがスカートを捲った。目をつむり、とても恥ずかしそうな、表情をする。

えっ？

顕になる太もも、そして、銀色の三角形。すなわちパンツ。タミネの細くやわらかな曲線で描かれた太ももの終着点。足と足がひとつになり、そして大切な部分をガードする一枚の布が、大広げにな

って、僕の視線を釘付けにする。

「そ、それでは…… LANケーブルを……」

訳がわからなかったが、言われるがまま僕は部屋の中から LAN ケーブルを持ってきた。

それを見るや、タミネはなぜか顔を赤らめ、そして、言う。

「では——やってください」

「はあ、なにを？」

「脱がしてください早く！ 後一分三十秒です」

何を脱がせばいいのかは、この状況でもはやあきらかだった。——パンツ——それ以外ないだろう。それを脱がすしか無い。脱がさなければ僕は殺されてしまう。

だからこれは仕方が無いのだ。仕方がない！ 決して好奇心や好き好んでやるのではない。僕は、僕はいけないことをするのではない。人間としてダメなことをするのではない。

命がかかっているんだ。ええいやけくそ！

「だアアアアアっつ！」

僕は、生まれて初めて、女の子のパンツをずらした。

正確には女の子の形をしたアンドロイドであるが、見た目が、仕草が、限りなく女の子に近いのだ。僕はもちろん、目を瞑って観ないようにする。

「ら……、LANケーブルを接続してください」

「何処？」

「接続口に……です」

開いた口がふさがらない。僕は、更に絶句する。なんとという悪趣味なのだ。くそう！ 未来の僕、一体何を考えてやがる。とんだ変態だ！！

僕はうつすら目を開ける。タミネはスカートをまくったままだ。駄目だ。いくら作り物とはいえ、未経験者の僕にはシゲキが強すぎる。こんな精巧な作りだ。なおさらヤバイ！！

「す、スカートを降ろせ！」

「はいッ！」

スカートを下ろした所で、僕は”接続口にLANケーブルを差し込むべく、スカート中に、拳を入れた。

「ご、ごめん！」

それから僕はまたしても未知の体験をするであつた。

「ああ、あああッ！」

「へ、変な声だすんじゃない！恥ずかしいだろ！」

太ももが僕の拳に触れる。

「いたッ！そこはダメ！キャッ」

頼むから黙ってくれ！外はすっかり明るい。家族が起き出す時間だ。それ以前に、あと何秒残っているんだ？

LANケーブルがこれ以上奥に進まない。僕はそこで手を止めた。
「せ、接続しました」

タミネが、顔を真赤にしたまま、目尻から涙を流したまま言った。
僕はすかさず、部屋に戻る。そして、PCのプログラムを起動。
コマンドを入力。

「アプリのディレクトリを教えてください」

白い画面にカーソルが点滅する。僕は底にタミネが言った、ディレクトリを入力する。

——残り、四十三秒——

最初に表示されたのはそれだった。その下にはパスワードの入力を求めるメッセージがヒョじされている。

なんだ！！何を入れればいい？僕は思い浮かんだ文字を入れてみた。

「Buruma」

「エラー。パスワードが間違っています」

無慈悲に表示されるエラーメッセージ。僕の額に嫌な汗が流れる。
「Burumadaisuki」

「エラー。パスワードが間違っています」

——残り、二十八秒

「burumahaotokonoromann」

「エラー。パスワードが間違っています」

——残り、十五秒

考える！考えるんだ！

このパスワードを設定したのは僕なんだ。だから絶対解けるはずだ。

——残り十秒。

クソウ。駄目だ！わからない！畜生！！

なんだ！なんだ！考える！考える！！考える！！！！

こんな、大切なミッションのパスワードだ。絶対、他人に見破られない。僕にしかわからないかつ、僕の性格だ。僕のすべてを投影した一言が、必ずキーワードになっているはずだ。

そうだ。だから絶対解ける。わかるはずだ。

考える！

——残り五秒。

考えるんだ！！

その時、僕は思考に上がる間もなく、指が勝手にキーボードを叩いていた。

入力した文字は「anoburumanosyugekigawasurerarenai」

——そう、”あのブルマの衝撃が忘れられない”。それだった。

——残り一秒。

一か八か、僕はエンターキーを押した。

点滅するカーソル。僕はつばを飲み込んだ。そして表示された。

——Accept——認証。

「パスの認証に成功致しました」

「助かった……」

体中の力が抜ける。額の汗を拭った。

午前七時。けたたましく目覚まし時計がなった。僕は目覚まし時計を止めてから、ベランダのタミネに向けて、微笑んだ。そんな僕を見て、タミネも微笑んだ。——ように見えたのは気のせいだろうか。僕はタミネのジャケットを拾ってからベランダへ駆け寄る。

タミネの正面に立って、肩を抱いた。彼女の肩にジャケットを掛けてやった。

とても穏やかな表情をしていた。僕は、彼女の頭を撫でた。

「ありがとう。お前のおかげで死なずに済んだ」

「いえ……」

「僕はまだ死ぬわけには行かないんだ。未来の僕がどうなつてようと、この僕は、今の僕は、僕でしか無い。だから、僕は今を精一杯行きたいんだ。まだ死にたくないか無い」

「はい」

僕はニコリ微笑んで、タミネの肩から手を話した。

「あの……用が済みましたら、ケーブルを抜いていただきたいのですが」

「ああそうか、悪い」

「あッ！」

「い、痛かったか？悪い」

「いえ……、大丈夫です」

何とも言えない気持ちになった。なんだかなか。ちょっと惜しいことをしたような気もしないではない。

いかんいかん、そういうプレイは高校男子にはまだ早すぎる。というか、朝っぱらから何考えてんだ。僕は。

「は、早くパンツは履けよ」

「申し訳ございません。ファイヤーウォールの再設定は博士にしてくださいなのですが」

「バカ！自分で履けよ！そんなこともできないのか！」

「いえ、現在ミッシェンの取り消しに演算を割いていますので体が

全く動かないのです」

仕方がない。いつまでもノーパンにしておく訳にはいかない。いくらアンドロイドだって言っても。

不意に風が吹いて、ひらり、なんてことになったら大変だ。僕の理性が抑えつけられなくなる。

「わ、分かった」

僕は意を決して、彼女の足元のパンツを拾いあげるべくしゃがんだ。

——ピンポン

ドアチャイムがなる音がした。

こんな朝早く誰なんだ。まあこの時間だと母さんも姉さんもとつくに起きている。どっちかが出るだろう。僕はそう思って現状の最も最優先されるべき、アンドロイドのパンツを履かせるといふ崇高な使命を続行するのであった。

「秀真？」

部屋の戸をノックする音になった。姉の声だった。僕は一瞬ぎよつとするが、カギをかけているんだ打丈夫だ。

「起きてるよ！」

僕はベランダから叫ぶ。そしてパンツの両端を摘んだ。タミネが、ゆっくり片足を上げる。

「入るよ」

と、その声と共に誰かが入ってきた。そのことに気づくのに数秒要した。

「秀ちゃん！？」

そこには、紺色のコートに、マフラーそして制服のスカートという通学時の格好をした仁絵が、姉ではなく、僕の彼女、仁絵が。僕の部屋の扉の前で、ベランダで、——ちょうど彼女から見れば、横向きになったタミネのとなりで、銀色のパンツを持ってしゃがんだ、

僕の姿が、しかもブリーフパンツ一丁で、ぎよつと驚きの表情で固まっているという姿を目の当たりにしている――。

彼女は口をぽかんと開け、肩にスクールバッグを抱えたまま――、一歩も動けず固まっているのだった。

「……」

僕は言葉を失う。頭が真っ白になった。

「ご、ごめんなさいわたし……。昨日、定期忘れちゃって、秀ちゃんに連絡したんだけど繋がらなくて、お姉さんに電話したら取りに来てもいいって言うてくれたから、だから、定期取りに来ただけでこ、こんな朝早く、本当にごめんなさい」

いつもおつとりして、ゆっくり話す仁絵が、ものすごい早口でべらべらと状況説明をした。

そして、”信じられない”という視線で見つめ、そんな表情を残して、「さよなら！」と叫んでから、僕の部屋を飛び出して行ってしまった。

僕は考えるまもなく、タミネを押しつけて、ベランダを飛び出し、部屋を飛び出し、玄関を出て、階段をかけ降りた！

右手には銀色のパンツを握っている。

団地の駐車場を猛スピードで駆け抜けてゆく、仁絵。僕は必死に彼女を追った。

とても早い。そっぴや彼女は、あの顔に合わず陸上部のエースだ。男の僕でも追うのがやっとだ。団地の敷地を出る。歩道橋の階段を駆け上がる。通勤、通学の人たちがちらほら歩いている。僕の姿を見て皆ぎよつとするが、僕はそんなこともお構いなしに仁絵を追う。

「待って！」

「来ないで！」

「仁絵！違うんだ！」

「ダメ来ないで！」

歩道橋を降りて、大通り沿いの歩道を走る。仁絵を追って走る。
「ついてこないで！」

仁絵がこんなにも感情を顕にしたのは初めてだ！僕は、それでも必死に追った。そして交差点に差し掛かった。

そこで、通勤途中のサラリーマン風の男とすれ違う。

しかし、その時悲劇が起きた。男が、僕を取り押さえた。必死に逃れようとする僕を、後ろから、思いっきり蹴り飛ばし、そして地面に伏せたところ、男は馬乗りになって僕の動きを封じた。仁絵は振り向くこともなく駅の方へ消えてゆく。

「離せ！」

「何をやっている変態！おい、その君！警察を読んでくれ！」

「違う！あれは僕の彼女なんだ！」

「ストーカーか、見苦しいぞ！」

「違うって！ホントにホント僕の彼女なんだ！」

泣き叫ぶも虚しく僕は、男に取り押さえられたまま動けず、そして、まもなくしてパトカーのサイレンの音と共に警官たちがやってきた。

このことは、人生最大の汚点となった。僕は、二時間近く、近くの警察署（交番ではなく）で事情聴取をされた。僕が名門私立清王学院の生徒であると主張しても何ら警察は信用してくれない。誰も言うことを聞いてくれなかった。無理も無いだろう”端から見れば、女のパンツを持って、ブリーフパンツ一丁で、女の子を追いかけている変態なのだ”

やむなく僕は母親に連絡をとることにした。電話で事情を話すと、母さんは、「今から迎えに行く」と、凍りついた声で言った。

制服を手渡してくれた時の母さんの、あの哀れみの表情は、生涯永遠に忘れることは無いだろう。僕を駅前で送ってから、母さんは、パートに遅刻することをばやいていた。

結局、学校についたのは十一時を過ぎていた。大遅刻だった。事情を説明するのに骨折りだ。まあ僕の場合優等生であるから、問題視はされないだろうが。

ちょうど休憩時間だった。廊下を歩き、教室へ向かう途中、なぜか、生徒たちの視線を感じた。ヒソヒソ話をしている感じもするのだが……

まさかさっきのが伝わっている？

いや、いくら何でもそれはない。僕はそう言い聞かせ、教室に入った。ところが、教室に入るや、一同クラスメイトの突き刺さるような冷たい視線が、僕に集中した。

「おはよう」

僕はクラスメイトたちに向かって挨拶する。窓際の席に座る十三が僕を一瞥した。僕は自分の席へ急ぐ。

「よう！」

僕は手を上げて十三に挨拶する。何故か十三は視線を逸した。訝しげに思い僕は近づいて話す。

「なんだよ」

「悪い」

十三は僕に手をあわせて、言った。

「はい？」

「すまんかった！ホントにすまん！」

「おいちよつと待って！何を言っている？」

——放送のベルがなった——

「二年A組み、一条秀真、一条秀真、今すぐ生徒指導室に来なさい」呼び出し？僕を？なぜ？遅刻したから？

ほらよ。十三は僕を促した。僕はカバンを机にかけるまもなく、教室を出て、そして生徒指導室へと向かった。

生徒指導室には生徒指導、学年主任の先生が待っていた。僕は軽

い調子で、「すみません。ちょっと寝坊しちゃって。昨日つい勉強頑張りすぎたんですよ。今度から気をつけますから……」と遅刻の弁解をした。

しかし、生徒指導の先生は表情を固くしたまま僕に告げていった。意外な一言を。

「君、今日から二週間、停学だから」

「はい？」

僕は学校から追い出された後、予備校への自習室へと立ち寄った。けれども、勉強には集中出来なかった。

停学。

その理由は最悪だった。悪夢だ。

——通学途中に僕のカバンを発見した、上級生が、わざわざ職員室に届けた。そこで、運悪く、十三から渡されたA Vを生徒指導の先生に観られてしまったというのだ——。それだけならまだしも、その噂が、ジャンルのマニアックさが届けた上級生達の興味を引き、あつという間に僕の名とともに校内中に広まってしまったというのだ。

そして僕は、二週間停学という憂き目にあってしまった。

こんなことで停学になるわ、仁絵にはとんでもない場面を見れるわで、僕は人生初、そして最大の屈辱を味わうことになってしまったのだ。

僕は途方にくれた。

そうだ。悪いのは、なにもかも！あいつのせいだ！！

僕はあちこち寄り道して、ゲームセンターで時間を潰し、本屋で、参考書を立ち読みして、けれども結局時間をもてあまし、午後三時すぎ、日が傾き始めた頃合い、帰宅した。

「畜生……母さんになんて言ったらいいんだよ」

玄関でつぶやいた。昨日徹夜したっていうのに、徹夜慣れしているせいかちつとも眠くない。携帯の画面を確認する。僕はため息を付く。仁絵が携帯を持っていれば今すぐ電話して弁解したいのだが。

だが、どのように弁解すればいいのだ。仁絵からすれば、彼氏が

ベランダで見知らぬ女のパンツをずらしているっていうシュールなシーンを目撃したわけで――

「しまった！そう言えばあいつ、ベランダに放置したままだった！」
僕は慌てて部屋へ駆け込む。開けっ放しの窓、誰の姿も見えなかった。しかし窓の外を確認すると、エアコンの室外機の前、ちょうど部屋の中からは見えない位置に、彼女は、アンドロイドはいた。体育座りをしていた。

「おい、お前ずっとここにいたのか」

タミネは顔を上げる。なんとなく、寂しそうな表情をしていた。

「ご指示がありませんでしたので」

「そうか。か、家族には見つかっていないだろうな」

「問題ございません」

「そうか、よかった。ってよくねえよ！！お前のせいで大変な目にあったんだぞ！」

僕は怒りに任せて、苛立ちをタミネにぶつけた。

タミネは何の反応もしない。僕は余計に苛立った。

「お前のせいでめちゃくちゃだ！仁絵には逃げれるし、警察には捕まるし、おまけに学校は停学だ！」

「申し訳ございません」

「ったく、何が死にたくなっただ。こんな変なもの送ってきやがって。こんな目にあわせやがって！こっちが死にてええよ！」

「申し訳ございません」

「謝ってもいみねえだろ！」

「申し訳ございません」

「だから意味ないって！」

タミネは立ち上がる。そして僕の瞳をじつと捉えた。

「ご指示を下しさい。私は博士のアンドロイドです。博士のためにミッションを遂行する義務があります。ですので何か――」

「いらねえ！」

僕は部屋へ上がった。

「お前のせいでこんな目にあつたんだ！もうイイ！さつさと未来に帰れ！僕は来年受験なんだ。こんな事で油を売っている暇はない。忙しいんだ」

「申し訳ございません。……それはできかねます。タイムトラベル装置はこちらの世界にはありません」

僕は返事しない。窓を思いつきりたたきつけるよう締めた。そしてベッドへダイブした。何も考えなくなかった。本当に最悪だった。仁絵の言葉が痛い。とても痛い。

エリートで完璧な僕の人生に、最悪な汚点ができた。僕はそことがとても受け入れ難かった。

畜生！

畜生！！

何なんだあいつ！！アイツのせいでくそう！

視界に入るベランダ。僕を覗き込むタミネのシルエット、僕は窓に向かつて、枕を投げた。「今すぐ消えろ！」

「はい」

タミネは短く答えた。

「役に立たなくて……すみません……でした」

タミネがうつむいた。そして振り向く、その瞬間、一滴んしずくが落ちるのを僕は見逃さなかった。

タミネがベランダのフェンスに手をかける。

僕はベッドを起き上がった。そして駆ける。

「待て」

僕は窓を開け放つ。タミネは振り向かない。

「何をする気だ」

「ここから、飛び降ります。うまくいけば……機能停止できるともいます。たぶん……。申し訳……。うざい……。ません……。が……。後、処分……。お願いします」

僕は言葉を失った。だがそれは、彼女の言動にではない。泣いて

いるのだ。泣いている。思いつきり、まるで人間の女の子みたいに泣いていた。けれども、とても静かに、声を上げず。まるで自分は泣いてはいけないものであるかのように、必死に涙をこらえて、けれどもこらえきれず泣いてしまったかのように。

僕は彼女の腕をつかんだ。

冷たい。

十一月の寒空の中、一日中ベランダに放置していたのだ。こんなに冷たくなって当然だ。

「おい？」

「なんでもありません。ただの誤作動です」

タミネは、僕の手を振りほどいた。

「今すぐやめろ！さっきのは取り消し」

「……」

タミネが手を止める。けれども何も言わない。僕に背を向けたまま固まっている。

数秒、沈黙が続く。夕焼け色に染まった運動場からは子供の声が聞こえる。

「ミッシヨンの変更にはパスワードの入力が必要です。パスの入力を——」

「えっ？」

僕の脳裏よぎる、今朝の出来事。

「また……あれをやるのか？」

タミネはゆっくり振り向いた。ちょっと顔を赤くしている。

「じょ……冗談です……」

涙に濡れた瞳で、彼女は微笑んだ。それはとても美しかった。

「じょ、冗談って？」

僕も微笑んだ。さっきまでの怒りは、もう何処かへと消えていた。

「す、すみません。今のは誤作動です」

「お前にはそんな機能が備わっているのかよ？」

「いえ、誤作動——」

「いいから、部屋に入れよ」

僕はタミネの言葉を遮って言った。

「よろしいのですか。私は——」

と、その言葉と共に、タミネが倒れかかってきた。僕は、とつさに両手で彼女の方を抱えた。

タミネの冷たい肌が、僕の指を伝わって、心に突き突き刺さった。

「おい、どうした？おい、何なんだ？」

「すみません。昨日から何も食べていなくて。……じゃなつかた。

その……エネルギー切れです」

「充電か？」

「いえ違います。電力はまだあります。そうではなく、生命維持に必要なエネルギー、人間でいうなら、食べ物に該当するものがが必要です。端的に言えば、お腹がすいて動けない……」

「なんだそれ？お前、食い物食うのかよ？」

「私の顎関節はそれほど精度が高くなく固形物を咀嚼するのは難しいです。したがって、専用の液体燃料が必要ですが……、それを頂けるとありがたいのですが」

「一体何が必要なんだよ！いえよ」

「一日、2000キロカロリーぐらい……」

「はあ？」

僕は、コンビニへ猛ダッシュした。タミネは僕のベッドで眠っている。にしても、あいつ、こんなモノ食うのかよ。

僕は籠いっぱいに、陳列棚にあるだけ、その飲料を買い占めた。

”十秒チャージ、二時間キープ”とパッケージに書かれた、一本あたり200キロカロリーだから、かける十で2000キロカロリー！

レジのお姉さんは訝しげに僕を見つめる。そして告げる。

「以上で、千九百八十円となります」

僕はなけなしの小遣いをはたいてそれを買ったのであった。

「ほらよ」

家に帰って、僕はウィダーインゼリーをベッドに眠るタミネに手渡した。

「ありがとうございます」

タミネは受け取って、物凄くお腹が空いていたのか、三秒で飲み干した。僕は、ベッドに腰をかけてそれを見ていた。

CMの謳い文句と違うぞおい。

「まだあるぞ」

タミネは次から次へと飲み干していった。あっという間に、十本が空になった。

畜生！今月のエロ本代が！

クソウ！

「さてと、模試の勉強でもするか」

と、僕はベッドから立ち上がって、机に向かおうとしたのだが、

「あの……」

とタミネが僕の手を握って呼び止めた。

僕は振り向く、なんだ？ちよつと不機嫌な表情で言ってやった。

「あの、わたしなにかお礼を……」

「そうだな。じゃあエロ本買ってきてくれ。僕が買おうとしてたやつな」

「か、かしこまりました。エロ本は無理ですが……」

数秒沈黙。

そしてタミネは服を、といういかプラグスーツを脱ぎ始めた。

「チヨチヨチヨ！何をする気だ！」

「だ、大丈夫です。性欲の処理くらいは……お役につけてみせますから……」

なんでまた微妙に恥ずかしそうな表情するんだよ！

アンドロイドならこついう時も淡々と脱ぎ脱ぎするだろ普通！

「バカ！僕はそんなこと命令していない！」

「か、かまいません。どうせそういう目的で作られた身体ですから」
「何を言ってるんだ？」

「って、そういう目的で作られた？」

まさか、未来の僕はそういう目的で作ったのか？あの野郎！
やつぱりとんだ変態じゃねえかクソウ！って、あいつ僕なんだクソ
ウ！

「そういう目的って……」

「この外装はオリエンタル工業製のものを使用しています。一体七
十万くらいはする上級モデルだそうです。だからその、身体は元々
そういう性質のものなんです」

「それって……おおおい！未来の僕はそんなにかわしいことの
為にお前を作ったのか！」

「大丈夫です。未来のあなたはまだ私を使っていません」

タミネは手を止めない。プラグスーツを脱ぎ捨て、遂に銀色の
ブラジャーも脱いでしまった。

まだ両手で胸を隠している。

落ち着け、こいつは人間じゃない。人間じゃないんだ。ただの機
械、アンドロイドなんだ。だからその、使っても問題なんじゃな？
仁絵とあんなことがあった。当分あってくれないし、口も聞いて
くれないだろう。だったら当分キス以上の関係に進展するのは無理
だ。まあキスもまだしてないけど。

だったら、いいじゃね？

いいよな。健全な高校男子。一回ぐらい……

ってよくねえよ。アンドロイド相手に、ってそれ人間として終わ
ってるじゃ。しかも初の相手が、機械って、虚すぎるだろ！！

「さあ」

タミネが迫る。僕は一步後へ下がる。

「早くしてください。は、……恥ずかしいんだから……」

またそうやって、恥ずかしがる！なんでだ！機械ならもつと機械

らしくしろよ！

僕の理性が、だんだん抑えられなくなってくる。タミネが目前に迫る。僕は目を瞑る。

ええい！

据え膳食わぬは男の恥だ！！

機械も人間も関係ねー！そこにロマンがあるかぎり！僕のミサイルはどこまでも飛んでゆく！

「キャッ！」

とタミネが飛び込んできた。床に落ちたケーブルに足を引っ掛けたりらしい。

僕は、とつさに受け止めようと、手をしだした。が、バランスを崩したタミネはあらぬ方向へそれる。

そして……

ふにゅッ

僕の手にはやわらかいものが。中央にやや突起を感じる。僕はほぼ無意識にふにゅにゅにゅしてしまった。

と、次の瞬間僕は真横から、とてつもない衝撃を食らった。そして、おもいきりふっ飛ばされ、壁に激突。

なんだ？

驚きと共に、見上げると、そこには涙目のタミネが……

「すみません！すみません！！」

タミネがものすごく慌てている。慌てている為そわそわしているのだが……

前がおもいつきり、開いている。

僕の鼻の穴から何やらドロリとした、液体が落ちてくる。僕は慌てて押さえる。

「違うー！！これは違うー！今ぶつかった衝撃で」

「ええと……その……わたし……わたし……」

タミネが赤面する。泣きそうな顔になる。

なんでだ？だお前アンドロイドだろ！

「あの——その、さっきのは誤作動で」

「バカ！前！隠せよ！」

「キャッ」

ようやく気づいて前を隠す。さらに泣きそうな顔になる。

「あの……」

「いいから、さっさと服を着ろ」

「はい……。本当に申し訳ございません」

僕は思った。

こいつは一体なんなのだろう。時々見せる、人間みtainな表情、仕草、行動。そして顕になる感情。

——本当に、ただのプログラムによるものなのだろうか。もしかしたら人間なんじゃないか？いや、それはない。人間に四階までのジャンプ力はない。今までの行動を鑑みる限り、アンドロイドと違ってまず間違い無いだろう。

けれども、この、時々見せる人間らしさは一体。

未来の僕は一体どれほど精巧なものを作ったのだろうか。

さっき殴られたのは、恥ずかしかったからなのか？？

ベッドに座って、服を着るタミネの背中が視界に入る。綺麗だ。透き通るような白い肌が僕の目を釘付けにする。ほんの数秒、思わず凝視してしまった僕は慌てて視線をそらした。

駄目だ。コイツは造物なんだ。そんなものに見とれてどうする？畜生！コイツが人間なら今すぐ頂きますしているのに……

「あの……」

タミネが、立ち上がって言う。なぜかモジモジして恥ずかしそうにしているのだが……

「なんだよ」

「いえ……」

視線を逸した。一体何を考えているんだ。いや、考えているという表現はおかしい、なんのプログラムを実行しているんだ？いや、それも変か。何のプロセスが動いている？

「言いたいことがあるならさっさと見えよ。僕は忙しいんだ」

「あの……その……」

「何なんだよお前は！」

なかなか言い出さない。僕は詰め寄ってきつく言った。
するとタミネは、小さい声で言った。

「私のパンツ、返してもらえませんか？あれがないとセキュリティに問題があります」

「ああ……」

僕はそういった後、今朝の光景を思い出した。

「悪い、落とした」

「えっ？ そんな……」

また泣きそうな表情をした。

どうすりゃいいんだよ。女物のパンツなんか持ってないぞ。

「ブルマならあるが履くか？」

「……」

「なんであるんですか？」

「中学の時、教室に落ちていたのを見つけて、先生に届けようとしたんだが、その前にブルマ泥棒が出たって女子の間で騒ぎになってな。うっかり届け出たらあらぬ疑いをかけるやもしれんと思って、家に持ち帰ることにした。もちろん洗ってあるぞ」

「……それって結局盗んだのは博士ってことに……」

タミネはしばし沈黙。視線を逸して一歩後へ下がった。

「ええと……」

僕はどう反応していいのかわからず先の言葉が出なかった。

「いえ、ご命令なら」

「いや、そんなマニアックな命令はしない」

「そうですか……」

タミネは、スカートを抑えた。

そうか、コイツずっとノーパンだったんだ。そのことを悟られま
いと、今まで自然に振舞っていたのか？いや、違う。アンドロイド
だもんな。そんな感情あるわけ。とはいえ、ずっとノーパンっての
もあれだな。そんな変態趣味は……

それも悪くないけど……

って、違うって！コイツはアンドロイドであって人間ではない。
そんな変態プレイはいけない。僕は変態ではないのだ。エロに対す
る欲求はあくまでも健全な高校男子としてごく普通の、ありふれた
ものであつてだな、決して変態、アブノーマルな趣味はない。

「分かった。ちょっと待ってろ」

僕はそう言つて、部屋を出る。玄関の近い廊下。そして僕の部屋
のとなりが、姉の部屋だ。ひとまずリビングへゆく。ソファアーの
上には妹のランドセルが放り出されている。机の上には宿題を済ま
せたのか、ノートと鉛筆が転がっており、学校のプリントが何枚か、
重なって置かれていた。

その一枚が目に入った。変出者が出たので、しばらくの間集団登
下校を実施しますとの内容のものだった。

変出者というのは……

まさか僕のことではなからうな。

どうやら家には誰も居ないようだ。僕は意を決して、ミッション
を実行に移す。

「よし！」

僕はリビングの広いベランダに出る。

そして良い息子として洗濯物を取り込んだ。

ミッションはそこにある。

姉のパンツを、そこから一枚拝借するのだ。けどちょっと待て？

ここから盗んだら何で洗濯物がなくなっている？そして取り込んだのは僕。一発でバレルではないか。

おっと、危ないところだった。

さすが名門私立清王学院高等部二年生特進科難関大選抜クラス所属かつ学年トップを常にキープをしている一条秀真。やはり僕は頭がいい。

僕は脱衣所から妹のパンツを一枚拝借してから、姉の部屋に侵入した。姉の下着だけ脱衣所に置かれていないのだ。タンスの中をあさり……

「ってねーちゃんなんてパンツ履いているんだ！」

それは高校男子にはあまりにも刺激的過ぎる、黒の紐パンだった。さすがにこれはない。

僕はある程度無難なパンツを一枚手にとった。右手に姉（20）、左手には妹のパンツ（10）を握っている。何故二つ必要なのかわかって？普通に考えれば、姉のやつだけで十分だろう。しかし、タミネがどちらを好んでいるのか分からないからだ。銀色のパンツからして姉のが候補に上がるが、未来の僕のことだ。もしかしたら、ジユニア用がいいって言うよう設定されている可能性も否めなくはない。

そのへんは抜かりなしだ。さすが名門私立清王学院高等部二年生特進科難関大選抜クラス所属かつ学年トップを常にキープをしている一条秀真だ。我ながら褒めてやりたい。

ついでに服ももらっていいこうか、と考えた。だが、鍵を回す音がした。玄関の扉が開いた。

僕は慌てて姉の部屋を出る。うっかり足を躓いて転んでしまった。玄関にぶちまける姉と妹のパンツ。略して姉妹パン。

真っ先に入ってきたのは妹。僕がパンツをかき集めるまもなく、「ママー！お兄ちゃんがシスコンー！」

と叫んで、まだおそらく階段の途中であろう母さんのところへ逃

げさってゆく。

なんでそんな言葉知ってんだよ！

姉と母さんの声がだんだん近くづく。僕は焦る。パンツは目の前。今ならまだ間に合う。

体を起こしては間に合わない。僕は匍匐前進。そして、妹のパンツを右手できゃっち。左手は間に合わない。姉のパンツを口で咥える！

すると……！

「なにこれ？」

玄関を入って、姉は一言。そして固まる。母さんは啞然として口を開いたままだ。

次第にこわばる姉の表情。

僕は意を決して立ち上がる。そして床に転がったパンツを指さしている。

「曲線 $P: Y = \log x$ と P 上野天 $(e, 1)$ における接線 l および x 軸で囲まれた図形を P とおいた時、 P を y 軸周りに回転してる立体の体積 V_1 は——」

言い終える前に姉のパンチが僕の頬を思いつきり打った。僕は後ろにのけぞって、部屋の戸に激突！

僕は KO 寸前になりながら、それでも懸命に続けた。

「ぞのがだち（その形）はパンツによく似ていて……。つまりその、僕は自分の答えが正しいがどうがより視覚的にたじがめだぐなりましてその……」

「何考えてんの！ あんたやっていいことと悪いこと解ってるの！」
姉が激怒して僕の大事なところをキック！ 落ちたパンツを回収した後「キモ！ 死ね変態！」と言い残して、部屋へと消えていった。

母さんは終始、妹の目を塞いでいた。

その後、僕は部屋から出ることは許されず、晩飯は抜きだった。夜になって父さんが帰ってきてから家族会議が開かれた。当然僕は抜きで。

そしてそれが終わると、僕は父さんの部屋に呼び出され母さんと二人で僕を説教。

父さんは、一応男だからと、理解を示す素振りをしながらも、家族に手を出すのはやっちゃいけないと、辿々しく話した。それだけ言っただけは何も言わなかった。

横で見ていた母さんが泣きながら「あんたがそんな性癖の持ち主だったなんて！母さん信じられない！もうあなたの顔なんか見たくないわ！」と言っていたのがとても痛かった。

運の悪いことに、僕はA V持ち込みが理由で停学になっている。母さんには当然連絡はしているのだろう。そのことを踏まえてのセリフだ。

「しばらくうちを出てくれないか。このままじゃ家族崩壊しかねん」
父さんは呆れるように言った。

そして僕は家を追い出された。

十一月の夜。寒空の中、僕はリュックサックいっぱい荷物を持って、両手にカップ麺と洗面用具などの日用品を抱えて、夜の道を歩いた。

少し後ろにはタミネがいる。僕が部屋を出ることになってからついてきたのだ。

付いて来るなといったが、わかりましたと泣きそうな顔で答えたので、勝手にしろといったのだ。

「申し訳ございません。私のせいでこのようなことになって」

「言つなよ」

「こんなことになるんなら、ノーパンで我慢しておけばよかったです。本当にすみません」

「言つなつて！もう！」

僕は苛立った。そうだ！お前なんか居るせいでこんな目にあつたんだ！くそう！クソツタレ！

「お前のせいで、僕は家族から変態のシスコン扱いだ！」

「本当にすみません。何お詫びすればよいか……。とにかく、あの……わたし、何でもしますから」

僕はリュックを下ろした。そして、中からブリーフパンツを取り出すとそれをタミネに向かって投げつけた。タミネは受け取ったがきよとんして広げているだけだった。

「履けよ。洗つてあるから大丈夫だ。ノーパンじゃ不意に風が吹いたらシヤレじゃ済まない」

「ダジャレになっていますよ今の」

「んなつっこみ入らねえよ！嫌ならいいけど、ああ勘違いするな！僕は男装趣味なんかないんだからな」

「そのフリーズは女子限定です」

「はい？」

「こうやるのです」

と、タミネはパンツを両手でつまんだまま。少し、ためらうような素振りをしてから、いつもよりすこいトーンを上げて言う。

「か、勘違いしないでよ。べべべ、別に。お兄ちゃんのパンツなんか、履きたくないんだからね！」

ダダダダダダッ！

H I T P O N T 1 0 0 0 !

僕は瞬間でノックアウト！

なんだこれは！何なんだ！

僕は未だかつて無い感覚に襲われた。それは何だろう。こいつに

一瞬心を奪われた。という表現では足りない。そう恋心とは違う。かわいいと思つた。というのでも違う。

どの表現も僕にはしっくりこない。なんだろう、しかし、僕は確実に心を打たれた！何なんだ

「何だ今のは？なんだ今のセリフ！」

「ツンデレのテンプレです」

「ツンデレ？」

「ツンデレとは……最初はツンツン、後はデレデレという意味でして……。すみません。あんまり良くわかりません。未来の博士は詳しいのですが……」

「そうか。にしてもな、何というは凄まじい破壊力のあるセリフだ！なんだこの湧き上がる感情は。こういうのをなんて言えばいいんだ？」

僕は思わず声に出して行つてしまった。

「そうですね。萌つてというのが正しいのでは？」

「もえ？」

「萌えです。草冠に明かりとかいて萌えです」

「そうか、萌か！よし、萌えー！！」

興奮のあまりついつく変な言葉を叫んでしまったではないか。そんな僕に、タミネはクスリと笑つた。僕はハツとして我に返る。「なに、言わせるんだ！すっかり話がそれてしまったではないか。つていうか、さつさと履けよいらねえなら返せ」

「す、すみません」

タミネは僕のパンツを履く。少ししゃがんで、ブーツを片方だけ脱いで、裸足になつて。

その裸足がまた綺麗で、夜の薄明かりがより一層風情を感じさせて、要するになにがいたいのかというと

——エロい。

そして僕の白いブリーフパンツはゆつくりと、なめらかな美しい曲線の足を登つて行き、また片方脱いで同じように登つて行き、最

後、両端をつまみながら上げると、銀色のスカートがたくし上げられて、

「あの……そんなにジロジロ観な……。いえ、ご命令でしたら——その……」

なんでまた赤くなっているんだよ

僕は視線を逸した。嫌ならいやとはつきりいえよ。

「あの、行く宛は？」

「じいちゃんの家。今放浪のたびに出てるから勝手に使わせてもらう。まあ昔から結構そうやって勝手に使っているからな。僕にとつては別荘みたいなもんだ」

祖父のうちは駅の向こう側、旧市街地にある。僕らの済むニュータウンとは違い、古い町並みに狭い入り組んだ道路の街を僕らはゆつくり歩いた。

国道から一步中へ入れば、道は更に狭まり車一台通れるかどうかも怪しい。街灯もぼつりぼつりと間をおいてしかなく、当然店のネオンもないくらい道だ。僕は久々に空を見上げた。星が、滲んでいた。月がとても綺麗だった。

「今日は、月が綺麗ですね」

タミネも空を見上げていたのだろう。そんな事を言った。

「なんだ。お前意外とロマンチックだな」

「すみません。今のは誤作動です」

「あのな。別に驚かねえよ。お前が時折人間みたいなことを言ったりしても。なにせ作つたのはこの僕だ。それくらい精巧にできていても不思議じゃないだろう」

タミネはまた笑った。

いや、それはさすがに自惚れ過ぎているだろう。言った側から思った。そうなのだ。時折見せる彼女の仕草や言動はあまりにも人間として自然で、アンドロイドとしては不自然なのだ。

未来の僕に聞いてみるか。

僕はそう思いながらまた歩いてゆく。

「博士」

「なんだ。っていうかいまさただけど博士ってのは僕のことか？」

「はい、そうですが。未来でもそのように呼んでおりました」

「ああそう。で、なに？」

「博士は好きな人いますか？」

「はあ？当たり前だろ。僕は仁絵が……」

不意に、僕から逃げてゆく仁絵の姿を思い出した。僕はため息を付いた。

「——もしも、その人がいつか月の世界に帰ってしまうと分かっていたとして、あなたはその人をずっと好きでいられますか？」

「はあ？何いってんだお前」

「いえ……、今は——」

「誤作動ってか？」

「はい」

コイツは一体何なのか。少なくとも感情というモノを持っているのだろう。

それは未来の僕が組んだプログラムに過ぎないのだろうが、どういう仕組みなのだろう。

いや、そもそも感情とは何か。何かを感じ、それを身振り手振りで表すことだけが感情とは言えない。表に出なくても思っている事はたくさんあるのだ。

こいつは果たしてどうなのだろう。表に出さなくても、今何か考えているのだろうか。

もしもそうだとすると、だとすれば、その感情、思いに、意味があるのだろうか。

人間ならば言うまでもない。表に出ない感情が自分自身を成長させる原動力となるのだ。ときには分かって欲しくて、ヤキモキすることもあるし、相手に腹をたてることもある。それが、僕ら人間にとって必要なものであることは言うまでもないし、当然のことなの

だ。

しかし、アンドロイドの場合は果たして……

歩いて三十分ほどになる。自転車や車だと直ぐなのだが、歩いてくると結構距離があった。

ようやく、爺ちゃんのうちにたどりついた。

「ここって……」

「どうした？」

「いえ、ここはその博士の……」

「どうした？なんかあるのか？」

「私、ここで暮らしていました。あなたと一緒に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9962y/>

The Radicalアンドロイド—タミネちゃん—

2011年12月3日23時48分発行